

中国紡績業再編期における市場構造

——湖南第一紗廠を事例として——

森 時 彦

はじめに

- 一 内陸民族紡の動向
 - 1 湖南第一紗廠の営業成績
 - 2 内陸民族紡の「黄金時期」
- 二 再編過程への転換
 - 1 シェーレから逆シェーレへ
 - 2 「黄金時期」以降の中国紡績業
- 三 一九二〇年以降の綿花流通
 - 1 綿花貿易の趨勢
 - 2 国内流通の再編
 - 3 綿花市場の「住み分け構造」
 - 四 再編期の市場構造と湖南第一紗廠
 - 1 湖南綿糸市場の構造
 - 2 湖南綿花相場の動向

注・付表
むすび

はじめに

民族工業の「黄金時期」に急成長した中国紡績業は、国内農村市場向け太糸の自給率をほぼ一〇〇%にまで引き上げること成功した。しかし間もなく、その余りにも急速な生産力の増大と、日本紡績資本の雪崩れをうった対中国進出という二つの要因から、「一九二三年恐慌」と称される深刻な景気後退局面を迎えることになった。

「黄金時期」から「一九二三年恐慌」への激動の軌跡は、それ以後の一九二〇年代から三〇年代前半にかけての中国紡績業に

大きな構造的転換をもたらした。「一九二三年恐慌」以降、急激な膨張期の後をうけた調整局面で、「黄金時期」にいたる初期段階の発展をおえた中国紡績業界では、従来とは異なる新たな市場環境のもとにおける業界再編の動きが活発になった。本稿では、「一九二三年恐慌」から日中戦争勃発までの十数年間を、ひとまず中国紡績業の再編期と措定して、分析を進めていくことにする。

この時期において特に注目し値する動向は、沿海地方における日本資本の紡績工場（「在華紡」）の勢力増大と内陸地方における中国資本の紡績工場（民族紡）の量的発展が、同時並行的に進行したことである。これら二つの動向は、相互に密接な関連性をたもちながら、紡績業再編期における中国市場の変化を、集約的に反映していたものであった。

そこで本稿では、内陸民族紡の一例として湖南第一紗廠をとりあげ、おもに「在華紡」の進出と民族紡の躍進にともなって惹起された「一九二三年恐慌」以降の新しい市場条件という所与の枠組みの中で、沿海地方における「在華紡」を中心とする先進的な紡績工場の趨勢と内陸地方における後進的な紡績工場の発展とが、いかなる構造的連鎖の関係で結ばれていたかを追究することにしたい。しかもその作業は、従来の研究がおく採用した経営あるいは技術の比較、対照という方法はとらず、もっぱら原料綿花と製品綿糸の両面から、市場条件の変化を動態的に分析することに主力をおいて進めるつもりである。

とくに湖南第一紗廠を選んだのは、その営業状況、市場環境などを分析するのに必要なデータが、比較的よくそろっているという資料面からの理由ももちろん大きい。が、いまだ少し積極的な理由として、つぎの二点を指摘しなければならない。

第一に、湖南市場は、湖北とのパイプがもつとも太い関係から、外界との商品流通も、長沙、岳陽を経由する確率が高く、とくに機械製綿糸のような工業製品の流れはその傾向がよいので、相当の精度で把握する可能性が期待できることである。第二は、湖南第一紗廠が民国期における内陸民族紡の典型とみなせることである。周知のように、湖南省は民国前半期の南北対立がもつとも激烈な地域であった。その中で湖南第一紗廠のたどった決して平坦とはいえない経営の過程は、民国期の内陸民族紡が程度の差こそあれ、ひとしなみに抱えていた問題点を、ほぼ共有しているように思われる。

一 内陸民族紡の動向

中国の民族紡績業は、上海に発祥し、武昌、寧波さらに江蘇の諸都市へと伝播していったが、「黄金時期」以前は概して、海外との交通の便にめぐまれた沿海都市とその後背地に立地することが多かった。欧米先進国からの移植工業という中国紡績業の性格上、このような立地は避けがたい選択だったといえる。しかし、「黄金時期」になると、そのような制約を乗り越えて、内陸の綿作地帯の中心地に立地する民族紡も次第に数を増してくる。湖南第一紗廠が中国紡績業界にその姿を現したのも、このような潮流が本格化した時期であった。

1 湖南第一紗廠の営業成績

湖南第一紗廠は、民国元年（一九一〇）に発起されたが、操業にこぎつけたのは、一〇年の歳月をへた民国一〇年（一九二一）になってからである。操業開始の後も度かさなる停業で、ずっと営業成績は振るわず、国民革命軍が湖南にはいつて後、民国一七年（一九二八）に操業を再開してはじめて、生産が軌道にのった。その間に経営形態は、民営から省立、さらに商租へ、そしてふたたび省立へと、目まぐるしく変わり、張敬堯のように時の支配者が軍費捻出のために、他省あるいは外国の資本家に工場の売却を企てたことさえあった。また華実公司承租の時期には、中国労働運動史上最初の犠牲者となった黄愛、龐人銓の事件も起こっている。

湖南軍閥政治に翻弄されたその数奇な経歴自体、民国期の政治と経済の接点としてきわめて興味をそそる課題ではあるが、ここでは前史の部分は割愛し、生産が軌道にのった一九二八年以降に限定して、その営業状況を追ってみたい。¹⁾

湖南第一紗廠は、一九三一年に織布部門の小規模な生産が開始されるまで、紡糸専門の工場であった。しかも生産する綿糸は、

農村織布向けの一六番手綿糸に特化し、使用する原綿も当初は地元湖南綿花でまかなわれていた。したがって、その営業成績は、湖南市場における綿花の購入価格と綿糸の販売価格、両者の動向に左右される立場にあった。

表一は、綿糸生産が本格化した一九二八年以降の採算状況を示している。純損益額には、一九三一年以降、兼営織布部門の損益も加わってくるが、三三年の純損六万九千余りを除けば、その額はごくわずかであった。

一九二八年は、綿糸一梱当たりの工場出荷価格が二五〇元近くの高水準であったのに対し、原綿コストは一五〇元余りで、典型的な「紗貴花賤」の状態であった。その結果、綿糸一梱当たりの純益は、第一次世界大戦期における民族紡績業「黄金時期」の再来を思わせるように、じつに三七元近くにも達した。この年の綿糸総生産高は、やや少なく二万二千梱を割ったが、それでも純益の総額は八〇万円を超えた。

その後二年間は、綿糸の出荷価格がやや下降気味であったのに反して、綿花の購入価格は一〇%程度上昇したため、一梱当たりの純益は低下したものの、なお二九年は二〇元強、三〇年は七元弱を確保した。一九二八年からの三年間で純益の総額は、一五〇万円近くに上り、工場建設に費やした経費をほぼ回収した計算になる。しかもこの利潤は、紡糸部門だけであげたものであった。この三年間は、まさしく湖南第一紗廠の「黄金時期」とよぶにふさわしい時期であった。

1932	1933
52,004	46,313
7,336	69,788
41,934	
101,274	116,101
374.18	391.92
147.44	138.98
66.73	65.29
214.17	204.27
212.40	189.24
-1.77	-15.03
25,350.96	25574.01
-44,855.99	-384,377.37
33,439.50	54,801.00
3,802.07	-69,383.55
-41,053.92	-453,760.92
-41,054.42	-453,823.65

この好況は、少なくとも一九三一年上半年までは、持続したものと判断される。ところが一九三一年六月、湖南省は未曾有の大^②雨で、大規模な洪水に見舞われた。この雨は、延々と八月まで降りつづき、洞庭湖周辺の綿作は壊滅的な打撃をうけた。さらに七月末の長江大洪水で、湖北の綿作も大打撃をうけ、湖南、湖北の綿花価格はいっきよに暴騰した。湖南第一紗廠の原綿コストも、一梱当たり、六月の一五七・七元から九月には二〇八・三元に三

表一 湖南第一紗廠の採算状況

項目		年	1928	1929	1930	1931
使用棉花の内訳 (担)						
	湖南棉花					42,234
	湖北棉花					24,875
	アメリカ棉花					21,491
	合計					88,600
紡糸損益	棉花打込率	1 梱当り斤	385.05	390.66	402.06	367.99
	原綿コスト(A)	1 梱当り元	151.01	163.87	166.38	170.01
	生産コスト(B)	1 梱当り元	60.27	60.11	66.00	76.46
	総コスト(C=A+B)	1 梱当り元	211.27	223.97	232.38	246.47
	出荷価格(D)	1 梱当り元	248.19	244.68	239.32	256.58
	1 梱当り損益(E=D-C)	1 梱当り元	36.92	20.70	6.94	10.10
	綿糸生産高(F)	梱	21,681.00	24,841.00	23,429.00	25,165.25
紡糸部門損益(G=E×F)	元	800,518.89	514,332.90	162,714.40	254,279.75	
織布損益	綿布生産高(H)	疋				2,674.00
	織布部門損益(I)	元				723.58
合計	純益(J=G+I)	元	800,518.89	514,332.90	162,714.40	255,003.34
	同上実数	元	800,519.22	514,332.94	162,714.05	255,004.11

資料) 使用棉花の内訳は、『長沙経済調査』68—81頁。その他は『民国二十四年湖南年鑑』547頁。

備考) 合計の「同上実数」とは原表の数値で、各項目からあらためて計算した「純益」と若干の相違があるが、1933年を除いては端数の処理方法の違いから生じたものと思われる。

二%も暴騰したものと推計される。綿糸一梱の工場出荷価格も六月の二四八・六元から九月の二六四元へ若干は上昇したものの、綿糸一梱当たりの推計損益は、六月の一四・四元の利益から九月には二〇・八元の欠損に転落した。「黄金時期」の要因であった「花賤」は、ここに終わりを告げた。

一転して「花貴」におそわれた湖南第一紗廠では、折りよく上海市場で最安値にあったアメリカ棉花を手当することで、この逆境を乗り切ろうとしたようである。一月に一万三千担にものぼるアメリカ棉花を購入したのを皮切りに、以後一年の間に六万三千担を超えるアメリカ棉花を購入した。この処置で原綿コストの上昇をある程度、抑えることができ、一九三一年の通年ではなお綿糸一梱当たりの純益は一〇元余りの水準を維持した。

翌三二年も、割安なアメリカ棉花の購入はさらに増加して四万二千担に迫り、全体の四〇%以上を占めた。この年は湖南棉花も下落したので、一梱当たりの原綿コストは通年で一四七・四四元にまで低下した。しかしすでに深刻化しはじめていた農村恐慌は、農民の購買力を低下させ、ひいては綿糸に対する需要も減退させていた。そのため、綿糸価格は四四元以上の暴落にみまわれ、一梱当たりの損益は、一・七七元の欠損に転落した。翌三三年は、

綿糸価格がさらに二三元以上暴落して、欠損は一五元余りに拡大した。その結果、織布部門の欠損も加わって、この年の欠損総額は四五万円を越す莫大な額に達した。

表一の生産コストには、労賃、燃料費、物品費等の直接コストだけではなく、折旧（減価償却費）、官利（公約配当金）などの間接コストも含まれている模様であるが、一九三二年が七六・五元と異常に高いほかは、六〇―六六元で大差はない。一九三二年が異常に高いのは、原綿を急遽アメリカ綿花に切り替えたため、それまで短い繊維の地元綿花用に調節してあったローラーが、長い繊維のアメリカ綿花を巻き込んでしまつて、たびたび故障を起こし、作業効率が低下したことも一因のようである。^③

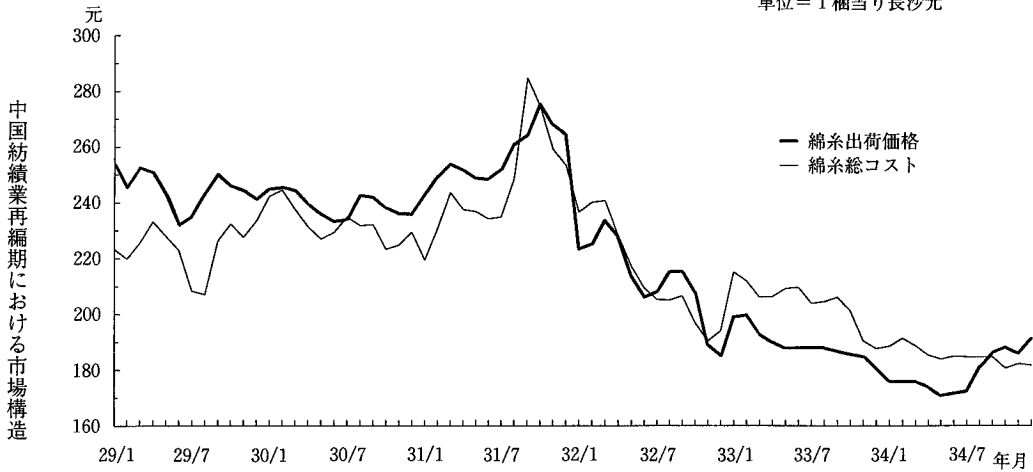
しかし逆に、アメリカ綿花の大量使用は、湖南第一紗廠の綿花打込率を大幅に改善するプラスの作用ももたらした。湖南第一紗廠の生産する綿糸は、一梱当たり三三〇斤と普通よりも一〇斤ほど多めであつたことを考慮にいれても、一九三〇年までの綿花打込率は最高で四〇〇斤を超え、極端に効率が悪かつた。通例では廢綿率は一〇―一五%程度であるが、一九三〇年の湖南第一紗廠では二〇%以上に達したのである。それが、アメリカ綿花を使用した一九三一、三二年には、打込率はそれぞれ三六八斤、三七四斤と大幅に改善され、廢綿率は通常の範囲内におさまることになった。^④湖南産の在来種綿花が、製造工程で多くの屑綿を出したのに対して、アメリカ綿花は挟雑物が少なく、屑綿も少なかつたからである。

以上のような次第で、アメリカ綿花の大量使用は、プラス、マイナス両面の作用があり、それが湖南第一紗廠の営業成績にあつた影響も、にわかには判定しがたいところがある。ともあれ、湖南第一紗廠の営業成績は、一九三一年を境にして、明暗を分けることになった。

このような状況は、一月毎の損益をみれば、より明確になる。図一は、月毎の採算状況を推計してみたもので、湖南第一紗廠の原綿コスト（表一のA）と綿糸出荷価格（表一のD）は、岳麓牌一六番手綿糸および常德綿花の長沙における毎月市価（付表一のE、H）に連動して月毎に変化し、生産コスト（表一のB）は年間を通じて不変であつたという仮定にもとづいて、出荷価格と総コストの推移を導き出している。

図-1 湖南第一紗廠の綿糸出荷価格とコスト

単位=1捆当り長沙元



資料) 出荷価格は、表-1のDが毎月、付表-1のEに連動するものとして算定した。コストは、表-1のAが付表-1のHに連動するものとして算定した毎月の原綿コストに、表-1のBを加えて推計した。

一見して分かるように、一九三二年七月までは、太線の出荷価格が常に細線のコストよりも上位にあったのが、大洪水による常德綿花の暴騰で、九月にはコストがついに二八〇元を超えて、出荷価格を二〇元以上も上回る逆転が起こってからは、一進一退の状況がつづき、三二年末以降はコスト割れの状況が定着した。その主な原因は、一九三一年後半こそ原綿コストの急激な上昇に求められるのであるが、一九三二年以降は明らかに綿糸出荷価格が一〇〇元以上の崩落に見舞われたことに由るものと分析できる。大洪水による原綿コストの暴騰は、たしかに業績悪化の時期を早めはしたが、その影響は一時的なものであった。換言すれば、たとえ大洪水が発生しなかったとしても、一九三二年以降の業績悪化は避けられない事態であったと考えられる。

総じていえば、湖南第一紗廠の採算状況は、一九三一年半ばまではおもに「花賤」に由来する好成績をあげていたのであるが、その「花賤」が六月の大洪水で破算になって以降は、農村恐慌にともなう急激な「紗賤」によって、深刻な業績悪化に追い込まれたものと、推定される。湖南第一紗廠の「黄金時期」は、農村恐慌の到来とともに、終わりを告げたのである。

2 内陸民族紡の「黄金時期」

一九二〇年代末から三一年にかけて好況を謳歌したのは、湖南第一紗廠にかぎった現象ではなかった。久保亨氏の詳細な経営分析によれば、一九二八年か

ら三一年にかけて中国の紡績業界は、天津の一部の紡績工場が欠損を出していたのを例外とすれば、全般的に好調で、表一の二のように払込資本金利益率の総平均は四年連続で二桁台を記録した。しかしこの総平均も、農村恐慌の深刻化とともに急速な下降線をたどり、三四年にはついにマイナスに転じた。

このような全般的な趨勢の中でも、とくに目を引くグループは、久保氏が華北内陸地帯と分類した四つの地方民族紡（石家莊の大興、唐山の華新、衛輝の華新、榆次の晋華）である。華北内陸地帯では、ほかの地帯よりも三年ほど早く一九二五年にはすでに、好況期に入っていた。払込資本金利益率の平均は、一九二五年に二七・六％に達して以降、一九二九年を唯一の例外として三一年まで一貫して二〇％以上を保持し、最高の年、一九二八年にはついに三〇％を超えた。この間一九二九年を除いては、つねに全国の総平均を一一・一七％も上回る抜群の好成績を収めた。まさしく、一九二五―三一年は内陸民族紡の「黄金時期」であった。

しかし一九三二年以降の景気後退局面では、華北内陸地帯は全国平均に比べ、業績悪化がやや足早であった。それだけ内陸民族紡は、農村経済の好不況に影響されやすい体質であったことを物語っているであろうか。

(%)				
1932	1933	1934	1935	1936
13.1	6.6	3.6	3.1	14.8
7.6	1.3	-18.0	5.5	17.5
4.2	-7.0	-5.8	1.4	
8.2	-2.2	-0.1	-0.8	11.7
4.8	-9.1	-4.7	0.7	14.3
18.3	6.7	4.6	1.4	
24.8	7.1	-7.7	-1.4	11.4
-3.5	-6.8	4.6	-3.0	9.9
	5.3	3.5		
8.6	0.9	-2.8	2.6	14.2
-1.8	-19.9			

久保氏の算定方式に基づき、湖南第一紗廠の払込資本金を二二八万元として計算すると、表一のように華北内陸地帯の平均に比べ、一九二八、二九年はやや高く、三〇年以降はかなり低い利益率になる。その原因は主として、一九三〇年は、五月の李宗仁、白崇禧ら「中華民国軍」の長沙占領、七月の「紅三軍団」の長沙占領などによる生産の阻害、三一年は前述の大洪水による原綿の暴騰に求めることができる。

詳細に比較すれば、各工場あるいは各地方固有の条件が反映して、利益率にも若干の差異が認められるものの、全体としてみれば、一九二五年から三一年にかけて

表—2 地帯別払込資本金当期利益率の年次推移

地帯	年										
	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	
上海・3工場平均	16.1	5.1	6.7	10.7	9.8	12.9	27.8	50.4	12.0	20.6	
江浙・3工場平均						6.2	20.4	19.9	5.6	9.7	
華北都市・5工場平均	15.5	3.7	-0.8	8.0	-3.0	1.9	0.1	3.6	1.7	2.7	
華北内陸・4工場平均		14.9	12.8	27.6	23.2	20.1	30.9	19.9	22.3	21.8	
石家莊 大興		18.8	22.2	31.0	30.2	27.0	36.3	29.8	31.0	36.7	
唐山 華新			7.6	21.2	12.8	9.0	16.9	14.9	15.2	32.9	
衛輝 華新	-8.6	11.1	15.1	35.6	18.1	4.5	13.6	6.9	7.1	20.8	
榆次 晋華		1.3	-33.4	6.9	41.7	59.1	75.7	24.7	30.1	3.8	
華中 武漢 裕華					-8.3		50.0	30.1	19.3	47.4	
全国・16工場総平均	12.7	6.0	3.4	12.9	6.2	6.8	17.5	22.3	11.3	16.6	
華中 長沙 湖南第一							35.1	22.6	7.1	11.2	

資料) 久保亨「近代中国綿業の地帯構造と経営類型」——『土地制度史学』第113号(昭和61年10月)35頁。湖南第一は表—1に同じ。

内陸民族紡が、第一次世界大戦期の民族紡績業「黄金時期」に匹敵する好況を謳歌していたことは、否定できない。

よく知られているように、上海、天津などの沿海都市と、大部分の内陸地帯とは、工業化のための条件が大いに違っていた。工場の建設、技術者の確保、労働者の募集等等、あらゆる点で、内陸地帯では沿海都市に比べ、格段に大きな困難がともなった。湖南第一紗廠でも、江蘇、湖北など外省出身労働者の採用が湖南人の省ナショナリズムを刺激して、係争の種になったが、先進地帯から熟練工を招聘することなしには、操業にこぎつけることは不可能であった。⁽⁶⁾

技術、労働力などの質の格差は、当然生産コストにも跳ね返ってきた。表—三は一六番手綿糸一梱につき、湖南第一紗廠の生産コストと、『七省華商紗廠調査報告』にみえる上海および地方での生産コストの平均とを比較したものである。それぞれ費目のたて方が異なっているため、内訳は若干の出入りがあるものと予想される。また調査の年もやらずれているので、厳密な比較は期しがたいが、上海と地方の格差を大ざっぱに知るには、さして問題はない。

まず、一九三一年における上海と地方の比較からみると、生産コストの合計で、すでに一五元近くの開きがある。内訳では労賃がほぼ拮抗している以外は、すべて地方の方が多くの出費を強いられている。とくに燃料とその他の開きが大きい。そのような地方民族紡の中でも、とりわけ湖南第一紗廠は、燃料と物品の費目は低く抑えているものの、労賃、事務費などがずば抜けて高いところから、合計では上海

表一 3 湖南第一紗廠の生産コスト
 単位=1 梱当たり元

区分 費目	1931年七省民族紡		湖南第一紗廠	
	上 海	地 方	1922年	1933年
賃 賃	12.869	12.780	24.559	22.1609
物 品	6.221	8.072	9.567	4.7517
燃 料	4.959	10.151	2.373	3.2605
利 息	9.931	10.675	7.948	9.1383
減 償 却	2.462	3.125	0.949	4.4988
事 務 費	1.543	2.730	3.754	5.8533
そ の 他	2.577	7.499	3.416	7.7600
合 計	40.562	55.032	52.566	57.4235
租 金			3.321	
官 息			2.277	3.8247
総 計			58.164	61.2482

資料) 1931年の上海、地方は王子建・王鎮中『七省華商紗廠調査報告』198, 210, 215, 222頁、湖南第一は1922年が長沙『大公報』民国13年1月20, 23—25, 28日、1933年が孟学思編『湖南之棉花及棉紗』下編89頁。

民族紡に比べ、じつに一七元近くも多くの生産コストを要した。一九三三年における湖南第一紗廠の労賃は、二三元余りで、一九二二年の二四元余りと比べても、あまり改善された形跡はなく、他の二倍に近い有り様であった。労働者一人当たりの賃金は、湖南第一紗廠がずば抜けて高給であったという事実はないから、結局のところ、湖南第一紗廠の労働生産性は、ほかに比べ半分程度であったという計算になる。

問題は、湖南第一紗廠に典型的なように、沿海都市の民族紡に比べて三〜四割も割高な生産コストを必要とした内陸の後進民族紡がなぜ、一九二五—三一年に限っては、沿海都市の先進民族紡をはるかに凌ぐ利益率を達成しえたのか、ということである。この疑問に対して、ただちに思い当たる要因は、内陸民族紡のおかれていた立地条件である。

農村在来織布用の太糸生産に特化していた内陸民族紡は例外なく、原料立地、販売立地に恵まれていた。綿作地帯の中に設立された内陸民族紡は、いささか粗悪にしても、太糸用の原綿には十分な地元棉花を使用することで、原綿手当の流通経費と中間マージンを最小限に抑えることができた。また従来からの綿作地帯は、同時に農村織布業地帯でもあった。内陸民族紡は、在来織布業が原料とする二〇番手以下の太糸を地元農村に供給することで、製品販売における流通経費と中間マージンも大幅に節減することができた。

上海、天津などの沿海地帯にくらべ、割安な価格で原綿を購入し、割高な価格で綿糸を販売することのできた内陸民族紡は、そのプラスマイナス分、より多くの利潤を得ることができたわけである。久保氏の提供している資料によると、河南省の衛輝（汲県）にあった華新紗廠では、一九二二—三〇年八年間の平均で、上海に比べ原綿コストは一担当たり三・〇三元、約六%低

く、綿糸出荷価格は一梱当たり一七・二七元、約八%高かったという。綿花打込率を三五〇斤とすれば、綿糸一梱当たり差引二七・八七五元も、衛輝の方が上海よりも有利であったという計算になる。⁽⁷⁾

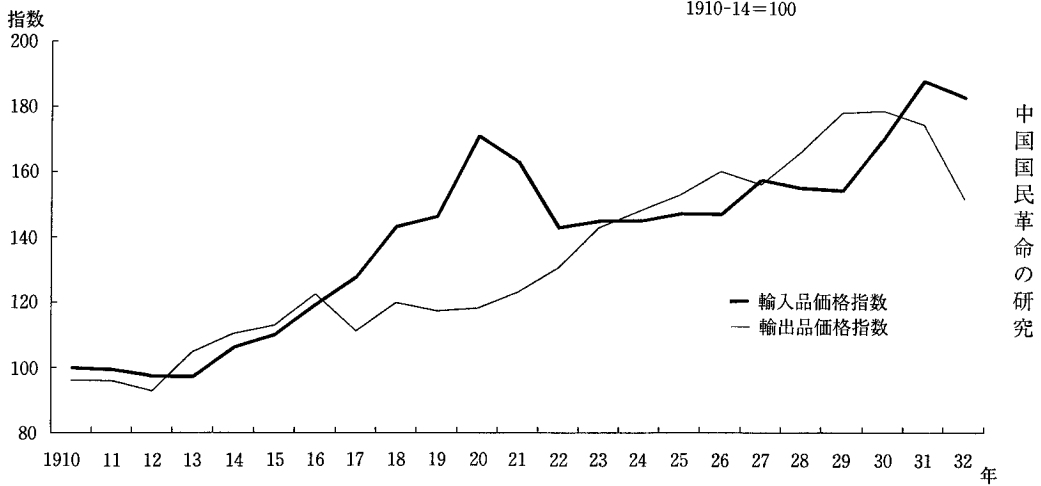
出荷価格が一梱当たり二〇〇元前後であった綿糸にあって、原料立地と販売立地による差益が、三〇元近くにも上ったことは、生産コストにおける内陸民族紡の劣勢を補うに十分な数字である。たしかに、内陸民族紡の「黄金時期」を説明するに際して、立地条件に由来する差益は、基本的なファクターとして真つ先に注目されるべきである。しかし、内陸民族紡の「黄金時期」がほかならぬ一九二〇年代後半に出来た原因を説明するためには、立地条件による差益が、そもそもなぜこの時期にとくに顕著になったのか、そのメカニズムを時系列の面から明らかにする必要がある。

一九二〇年代後半に、内陸民族紡の立地条件がとりわけ有利な局面を迎えた要因は、内地地帯固有の問題として局部的な考察をすすめるよりは、むしろ「一九二三年恐慌」以降における中国紡績業界全体の構造的変化がもたらした、いくつかの現象の一つととらえ、中国の全体的趨勢の中から、その因果関係の糸口を模索する方が、核心に近づきやすいように思われる。換言すれば、「一九二三年恐慌」以降の中国紡績業の再編過程そのものが、内陸民族紡の「黄金時期」を招来する要因を胚胎していたのではないか、という見通しのもとに、問題解決にアプローチしてみようというわけである。

一一 再編過程への転換

中国紡績業が初期発展の段階から再編過程に転換する分水嶺となったのは、「黄金時期」から「一九二三年恐慌」への激しい景気変動であった。そこでまず、この激しい景気変動がいかなる性格のものであったのかを、マクロの視点から概観した後、それが紡績業においてはいかなる規定要因として作用したかをみていきたい。

図-2 中国の輸出品と輸入品の価格指数



資料) 久重福三郎「物価より見た支那経済の一面」——『支那研究』第36号(昭和10年3月)125-126頁。

1 シェーレから逆シェーレへ

「黄金時期」の間に、軽工業が無視できないほどの規模にまで急成長したとはいえ、中国はなお農業生産が国民経済の大部分を占めていた。この構造は当然、対外貿易にも反映し、農産物あるいは鉱産物の第一次産品を輸出して、工業製品を輸入するのが、その基本的なパターンになっていた。しかも輸出用第一次産品の価格は、国際市場の相場変動に従属的に追従するのが普通であった。そのため、農産物を原料とすることの多い中国軽工業は、つねに国内の農業生産と海外の市場動向という二つの要因に、その景気動向を左右される立場に置かれていた。さらに輸入代替型の軽工業にあっては、外国工業製品の圧力も当然、見過ごすことのできない要因であった。

図-2は、一九一〇—三二年の二十余年間にわたって、上海での輸出品価格指数と輸入品価格指数とを対比したものである。ただちに見てとれるように、両者の関係でポイントとなる年は、第一に一九一六—一七年、第二に二三—二四年、第三に三〇—三一年を指摘できる。第一のポイントでは、それまでほぼパラレルであった両者の関係が崩れ、輸入品価格指数が一方的に上昇して、大きな乖離が生じた。乖離が最大になった一九二〇年には、輸出品価格指数のわずか一一八に対して輸入品価格指数の方は、一七一にまで跳ね上がった。しかし、この甚だしい乖離もその後は急速に縮まり、第二のポイントを境に逆転し

図-3 華北卸売り物価指数



資料) 久重福三郎「物価より見た支那経済の一面」——『支那研究』第36号(昭和10年3月)128頁。

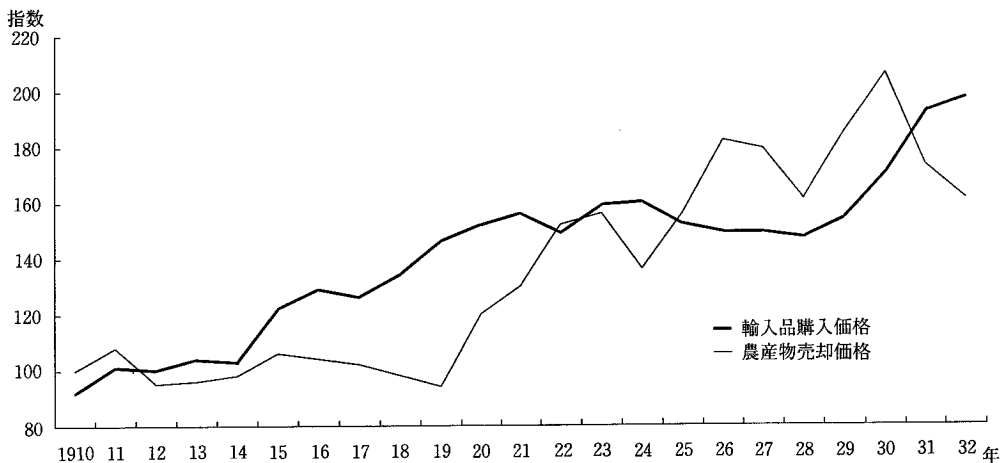
て、輸出品価格指数がわずかながら上位にでた。一九二六年には輸入品価格指数、一四七に対し、輸出品価格指数は一六〇で、二三ポイント余り上回った。その後は一進一退の状態であったが、第三のポイントで、おもに輸出品価格指数の急落に因ってふたたび逆転がおり、三〇年代は輸入品価格指数が上位を占めた。

もし大まかに、輸入品非工業製品、輸出品非農産物と読み換えることが可能であるとすれば、中国ではシエール(工業製品価格と農産物価格の狭状価格差)が、第一次世界大戦後期から急速に拡大して、一九二〇年にそのピークに達したが、それ以後は急速に縮小に向かい、一九二三年をさかいに逆転して二六年まで「逆シエール」ともいべき状況が生じた後、一九二〇年代後半は一進一退で推移し、一九三二年にいたって農産物価格の暴落による再度のシエールが出来した、と解釈できる。⁽²⁾

このような趨勢は、沿海都市での通関レベルにおける輸出入品価格指数にのみ現れる現象ではない。図一三は、華北における農産品と製造品の卸売物価指数を対比したものである。一九一五年から一七年まで製造品と同じく騰勢にあった農産品は、一七—一九年の間急落に転じ、一九年には農産品の九七に対し、製造品は一三二とシエールは最大の幅になった。その後は、農産品が急騰して、二三年にはシエールは解消した。二三—二五年の間は、逆シエールともいえるべき状況が進行し、その後二七年まで三〇ポイント近くの乖離がつづいたが、二

図-4 武進での農産物と輸入品の価格指数

1910-14=100



資料) 張履鸞「江蘇武進物価研究」——『金陵學報』第3卷第1期(民国22年5月)164-167頁。

八年からは解消に向かい、三二年に至ってふたたび製造品が上位に立って、シエール状態に回帰した。

さらに図一四は、江蘇省武進県における農産物売却価格指数と輸入品購買価格指数とを対比したものである。輸入品は、十九品目中一品目を除いてすべて工業製品とみなしてよいものである。⁽³⁾

一九一五年から一九年にかけては、農産物売却価格がやや下落気味であったのに対し、輸入品購買価格の方は、二一年まで急騰しつづけた。一九一九年には、農産物売却価格指数の九四に対し、輸入品購買価格指数は一四六に達し、その乖離は五二ポイントにも及んだ。しかしその後は、農産物の方が急騰をはじめ、一九二二年には一五二まで上がり、若干下落した輸入品の一四九をわずかながら上回った。二三年からは一進一退があつて、先の二つのデータとはやや様相を異にするものの、二〇年代後半は二八年における急接近を除いて、概して農産物売却価格指数が上位にあつた。その状態は一九三〇年まで続いたが、三一年には農産物が一七三に下落したのに反して、輸入品の方は一九二に急騰して、ふたたびシエールが生じた。

上海での輸出入品価格指数、華北での農産品、製造品卸売物価指数および武進での農産物売却価格、輸入品購買価格指数、この三者の間には、以上見てきたようにいささかの出入りは認められるものの、基本的な点での相違はない。三つのデータが一致して指し示すところによると、中国では沿海都市でも内地農村でも、

第一次世界大戦後半から工業製品価格の急騰でシエールが進行して、「黄金時期」の一九一九年から二〇〇年にかけてピークをむかえた後、急速に縮小にむかい、「一九二三年恐慌」に至る一九二二年―二三年の間にほぼ解消した。その後はむしろ農産物価格の方が上位にあつて、逆シエールとでもいふべき状況が二六年まで進行した。それ以降は、データ毎にややまちまちの嫌いはあるが、逆シエールの状況は徐々に解消の方向に向かい、やがて一九三一年前後になると、農産物価格の急落でふたたびシエールが顕著になった。

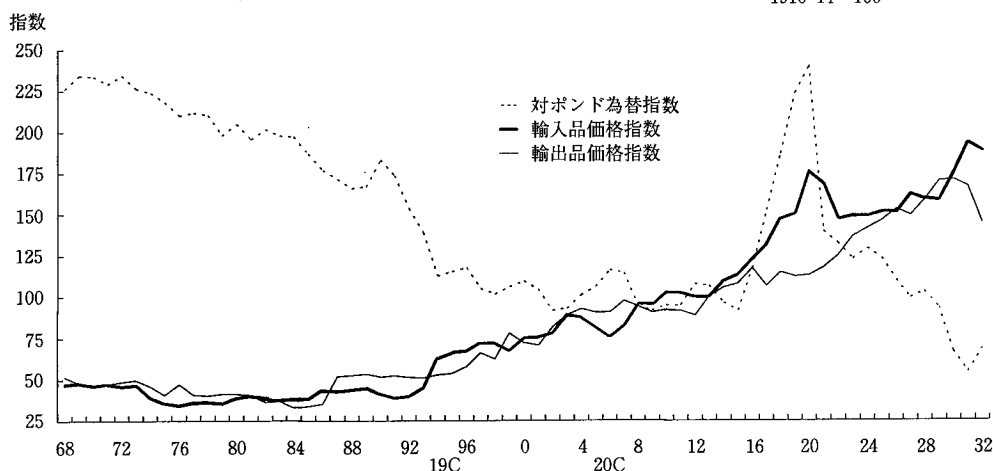
一九一〇年代後半から三〇年代前半にかけての中国の物価動向は、一九二三年と三一年という二つのポイントをさかいに、シエールから逆シエールへ、そしてふたたびシエールへというジグザグのコースを歩んだのである。

以上のような変遷は、一九一〇年代後半から一九三〇年代前半にかけて、中国の民族工業がたどった景気動向と、比較的良好一致している。第一次世界大戦後期から急速に拡大したシエールは、民族工業の勃興にとつて、もつとも理想的な市場条件を提供し、「黄金時期」を招来した。しかし、一九二〇年以降はシエールの縮小につれ、空前の好況も後退しはじめ、二二年半ばには不況色が濃厚になつて、やがて「一九二三年恐慌」に突入していった。一九二三年以降の逆シエールのもとで、景気は低迷をつづけたが、二六年前後をピークに逆シエールが解消に向かうと、景気も回復しはじめ、二八年には好況といつてもよい状況が到来した。この好況は四年余り持続した後、一九三二年からの農村恐慌とともに、後退局面を迎えたのである。

一九三一年以降のシエールは、一九一〇年代後半のそれとは違つて、民族工業に不況をもたらした。一九一〇年代後半のシエールがおもに工業製品価格の高騰に起因したのに反し、一九三一年以降のそれは、もっぱら農産物価格の暴落に因る、という明確な相違が、相反する結果をもたらしたものと考えられる。中国民族工業のよつてたつ基盤である農村経済が、一九一〇年代後半には工業製品の高騰にもかかわらず、農産物価格の堅調により比較的安定していたのに対し、一九三〇年代前半は農産物価格の崩落で疲弊の極におちいったため、民族工業の製品は最大の市場で苦境に立たされることになつたものようである。

このような変動の原因を完全に説明するためには、おそらく当時の中国のマクロ経済を世界経済との関連から分析する相当規

図-5 中国の対ポンド為替指数と輸出入品価格指数 1910-14=100



中国国民革命の研究

資料) Hsiao Liang-lin, *China's Foreign Trade Statistics 1864-1949*, Harvard University Press, 1974. pp. 190-192. 輸出入品価格は図-2に同じ。

模の作業が必要であろうが、ここでは以下の行論に欠かせない範囲でのみ、最小限の考察を加えておくことにしたい。⁽⁴⁾

まず鍵になるのは、中国が対外貿易では当時世界でほとんど唯一、銀本位制の国であった点である。図一五のように、金本位のポンドスターリングと銀本位の海関両との為替レートは、一八六〇年代以来半世紀以上にわたって銀安傾向が進行していた。一海関両当たり、一八六四年には七シリング五ペンスであったのが、一九一五年には二シリング七ペンス八分の一と、ほぼ三分の一にまで下落した。この銀安は、輸出入品の銀建て価格を上昇させた。図一五の指数では、輸入品が一八八四年の三六・一から一九一五年の一〇・〇へ、輸出品が同じく三四・五から一二・九へ、それぞれ三倍以上に上昇した。

ところが、第一次世界大戦の勃発とともに、この半世紀以上にわたる銀安傾向は、一転して急激な銀高にかわった。一九二〇年には、一海関両は六シリング九ペンス二分の一にまで急騰し、ほぼ一八六七年の水準にまで戻した。半世紀もの長きにわたって下落しつづけた銀価が、わずか四年間で回復したことは、第一次世界大戦時期の為替変動の激しさを物語っている。それにもまして注目し値するのは、銀の急激な高騰にもかかわらず、輸入品の銀建て価格が下落するどころか逆に高騰していることである。⁽⁵⁾

その主な原因は、欧米諸国および日本での物価が第一次世界大戦時期に銀高のペースを上回る暴騰をつづけたことによる。例えば、イギリスでの卸売物価

指数（一九一〇—一九四一）は、一九一四年の二〇三が一九二〇年には三〇四に急騰した。その結果、輸入品≠工業製品の銀建て価格は、激しい銀高にもかかわらず逆に上昇させたのである。これに対して、輸出品≠農産物の銀建て価格は、銀高効果がある程度浸透して、一九一九年までは横ばい状態のまま推移した。こうして輸入品≠工業製品の銀建て価格指数が、輸出品≠農産物の銀建て価格指数を五三ポイントも上回る状態が、一九一九年に出来たのである。

国際的な規模で進化したこのシェーレこそ、第一次世界大戦時期に中国の民族工業が勃興する一つの大きな原動力となった。輸入品≠工業製品の高騰は、中国産の工業製品の市場価格にもはねかえって、その高騰を促した。一方、輸出品≠農産物の価格低迷は、原料価格の安値安定を意味した。中国産の原料を使用する民族工業にとっては、原料安の製品高という理想的な市場環境が生み出されたのである。このような理想的な市場環境の「黄金時期」に、国産の原料を加工する輸入代替型の軽工業が、急速な発展を遂げるようになったのである。

だが農業と手工業の在来セクターが国民経済の大部分をしめていた当時の中国では、あまりに急激なシェーレとそれにとまらう近代セクター≠民族工業の急成長はおもに、二つのリアクションを招いたものと思われる。第一は、在来の手工業がなお工業に対抗している分野では、高騰しすぎた工業製品にかわって、手工業製品がその分売上を伸ばして工業製品の市場を狭めるとともに、工業製品のいきすぎた高騰を抑制する。第二に、工業原料となる農産物は、相対的な値崩れから農民の生産意欲の減退をまねき、やがて生産減少による反騰にいたる。とくに「黄金時期」のように、わずか数年の間に生産力が数倍にも急増したケースでは、需給関係の急変が、深刻な製品過剰と原料不足をもたらし、製品価格の急落と原料価格の急騰をよぎなくした。

「一九二三年恐慌」は、この原料高の製品安という市場環境が極度に進行した現象であった。しかも二〇年代は、世界的な傾向としては、第一次世界大戦時期と違ってかわって、デフレの傾向が顕著であった。イギリスでは、一九二〇年に三〇四の最高峰を極めた卸売物価指数は、二〇年代前半に、一瀉千里の下落をみ、二三年には、一五六まで下がった。二四、五年には、微少な一時的反騰がみられるものの、その後も世界恐慌をはさんで下落し続け、一九三三年には九八にまで下がった。一方、同じ

く一九二〇年にピークを記録した銀高傾向も、二一年には一海関両当たり三シリング一一ペンス一六分の七と、わずか一年で半分近くにまで反落し、一九三三年には一シリング二ペンス一六分の一三と、ピーク時の五・五分の一にまで暴落した。

これら二つの世界的規模の現象は、中国に以下のような影響を及ぼした。まず輸入品非工業製品は、銀安であるにもかかわらず、欧米先進国でのデフレ傾向の影響で、二三年まではむしろ下落さえした。二三年以降は、さすがに上昇に転ずるが、その勢いはきわめて微弱であった。これに対して、輸出品非農産物は、欧米先進国でのデフレにもかかわらず、急速な銀安傾向にかけて加えて、民族工業の原料需要急増による国内需要の堅調に支えられて、根強い上昇傾向にあった。ある場合には、中国産の原料の方が、外国産に比べてかなり割高になるケースもでてきた。

その結果、第一次世界大戦後期から戦後にかけてのシエーレは、「一九二三年恐慌」の時期に完全に解消したばかりでなく、二〇年代半ばには、輸出品非農産物価格指数が、むしろ輸入品非工業製品価格指数を大きく上回るにいたる。急激なシエーレの直後に、引き続き出来したこの逆シエーレともいべき状況は、勃興まもない中国の輸入代替型軽工業に、原料の調達、製品の生産・販売の両面にわたって新たな対応を迫った。「黄金時期」の極端なシエーレのもとでは、工業製品は企業経営の良否にかかわらず、生産しさえすれば利潤が期待できるような一時期があった。ところが、逆シエーレの状況では、企業間の経営格差が大きく営業成績を左右することになった。原料コストを削減し、製品の付加価値を高めることが、企業の至上命題となった。

しかも当時の中国では、不況下における経営の合理化は、企業間競争の激化ばかりでなく、中国資本の企業と外国資本の企業の格差をも顕在化させる結果をもたらした。とくに第一次世界大戦期から中国への資本進出を本格化した日本企業は、「一九二三年恐慌」を機に中国市場での優位を確立しはじめた。「一九二三年恐慌」以後の中国経済は、このように逆シエーレのもと、農業生産が一定の活況を呈する一方、工業は調整局面に入り、淘汰による企業の再編成が進行しつつあった。

しかし、一九二九年アメリカに端を発した世界恐慌が、やや時間をおいて一九三一年に中国にも影響を与えはじめると、農産物価格が工業製品価格に先だって崩落を開始し、一九二〇年代の逆シエーレは解消して、ふたたびシエーレが生じた。一九二〇

年代後半における農業生産の一次的活況はたちまちのうちに萎縮してしまい、一九三〇年代前半は「農村恐慌」が吹き荒れることになった。

2 「黄金時期」以降の中国紡績業

前節でみたような中国経済のマクロの動向は、一九一〇年代後半から三〇年代前半にかけての中国紡績業の動向をいかに規定していったのであろうか。ごく大まかに、シェーレから逆シェーレへの転換を背景とする中国紡績業の展開を追ってみることにしたい。

第一次世界大戦期におけるシェーレは、紡績業では「紗貴花賤」（原綿安の綿糸高）という市場環境としてあらわれ、莫大な利潤をうみだした。その利潤がさらに紡績業への投資意欲をかきたてた。こうして惹起された「黄金時期」の紡績工場建設ラッシュは、原料綿花と製品綿糸の両面にわたって中国市場の需給関係を一変させた。

まず原綿の需給関係は、どう変化したのであろうか。「黄金時期」に生産力をいっきよに三倍以上に膨張させた中国紡績業は、当然その原綿需要においても相応の激増をみせた。一錘当たりの年間原綿消費量を二・一担と仮定して推計すれば、中国紡績業の原綿需要は、一九一五年の二〇四万担から二一年には三九三万担にほぼ倍増し、さらに、二五年には六九七万担と、五〇〇万担近くも増加した計算になる。これに対して、中国の綿花生産高は一九一八年の一〇二二万担、一九年の九〇三万担という二年続きの豊作の後、二〇年六七五万担、二一年五四三万担と二年にわたる不作で、いっきよに半分近くに減少してしまった。しかも中国の在来種綿花は、繊維が太くて短いため、そもそも紡績用にはあまり適していなかった。ある推計では、中国綿花の中で純然たる紡績用といえるものは一七〇万担程度しかなく、一六番手までなら、なんとか紡績用の原綿として使用できる綿花を含めても、四〇〇万担をわずかに超える程度しかなかったという。したがって中国では大体一九二一年を境にして、国産綿花だけでは国内紡績用の原綿を手当できないという状況が出現したものと推測される。⁽⁶⁾

需要の急増と供給の急減あるいは絶対的不足という背反する要因の挾撃を受けて、中国綿花相場は一九二一年後半から暴騰した。例えば、当時中国の代表的な紡績用原綿であつた通州綿花の上海での現物相場は、一九二一年三月の二三・七五両という底値から、わずか半年後の九月には三七両まで五五パーセント以上も暴騰した。その結果、中国の綿花相場は、折から進行していた猛烈な銀安傾向にもかかわらず、国際綿花相場、とりわけ中国綿花と用途を同じくするインド綿花の相場に比べて、割高感が急速に高まつた。「黄金時期」をもたらした不可欠の要因が、中国綿花相場が一九一八年後半から二〇年前半にかけて国際綿花相場から隔絶したような安値安定の相場を呈したことにあつたとすれば、二一年後半以降の事態が、まったく逆の結果をもたらすであろうことは、明白であつた。

「黄金時期」後期に顕在化したこのような中国綿花の需給逼迫は、国内流通の面でも、国際貿易の面でも従来の様相を一変させる可能性をはらんでいた。

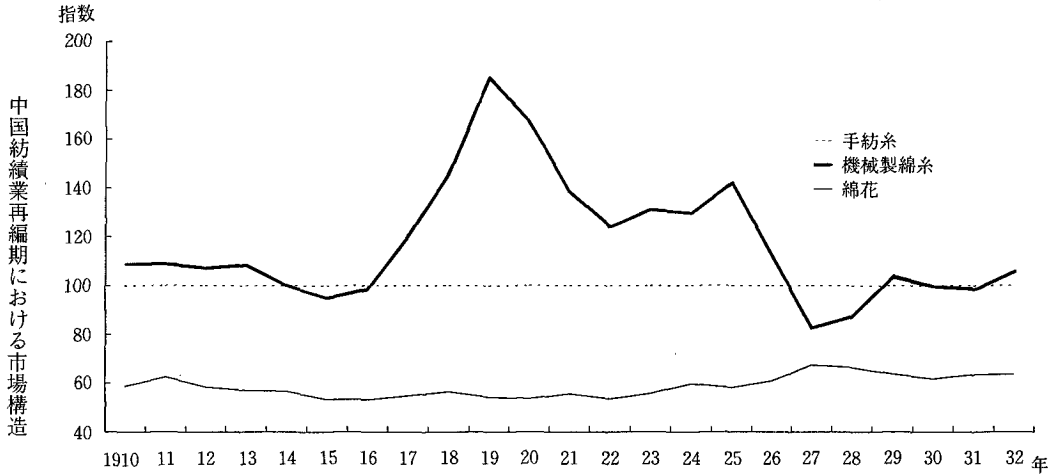
一方、製品綿糸の需給関係も一九二一年から二二年にかけて、重大な転機をむかえた。中国農村の在来織布業における機械製太糸（二〇番手以下）の消費高は、十九世紀末年にほぼ四百万担の水準に達したあと、二十世紀にはいつてからは一貫して四百万担前後で停滞してきたものと推測される。⁽⁷⁾ 中国紡績業はおもに、この四百万担とみこまれる農村の太糸市場をインド、日本などの外国綿糸から奪回することで、成長を続けてきたのである。ところが、仮に一錘当たりの綿糸年産高を一・九担とすると、中国紡績業の綿糸生産高は一九一五年の一八五万担が二二年には四八七万担にも増加したことになり、農村市場から外国綿糸を完全に駆逐したとしても、なお一〇〇万担近くの生産過剰に直面した計算になる。

しかも実際には、四百万担とみこまれる太糸市場のパイが、「黄金時期」には若干の縮小にみまわれることすら、ありえたのではないかと推測させる材料が二、三ある。

図一六のように、江蘇省武進での機械製綿糸の小売り価格と、綿花価格と農工労賃から割出した手紡糸コストとを比較してみると、「黄金時期」に外国綿糸の投機的暴騰につられて中国綿糸も実需とかけ離れた暴騰を続けたので、一九一五年までは手紡

図-6 武進での手紡糸の機械糸、綿花との価格比

手紡糸=100



中国紡績業再編期における市場構造

資料) 張履鸞「江蘇武進物価研究」——『金陵学報』第3巻第1期(民国22年5月)215頁。

備考) 手紡糸価格は、1括(8斤)当たり8.5斤の原綿代金と10日の日当(年工労賃を300日で日割り)を要するものとして推計した。

糸コストとほぼ平行であった機械製綿糸の小売り価格は、一九一八年から一九二〇年にかけて手紡糸コストの二倍近くにまで急騰した。そのため、中国の農村ではこの時期、暴騰した機械製綿糸に見切りをつけて、ふたたび手紡糸を織布の原糸に使用するといった事態が、かなり広範に発生したようである。

徐新吾氏の推計では、中国農村での手紡糸の消費高は、最盛時一八六〇年の六二五万担から一九一三年には四分の一以下の一四三万担まで減少したものの、一九二〇年には倍増して二八二万六千担まで回復したという⁽⁸⁾。これほど劇的な手紡糸の復活があったとすれば、中国農村における機械製太糸の需要に減退がなかったとは、到底考えられない。ともあれ、四百万担のパイ自体が縮小を予想されるうえに、一九二二年にはなお、一二〇万担を超える外国綿糸の輸入(当時はすでに、二〇番手超過の細糸が多くを占めるようになってはいたが)も確認されるのであるから、中国紡績業における太糸の生産過剰という事態は、どの点からみても否定しがたい事実であった。

紡績用良質綿花の絶対的不足と農村市場向け太糸の生産過剰という、原料と製品の両面にわたる需給関係の逼迫は、「花貴紗賤」(原綿高の綿糸安)という市場環境をうみだし、やがて中国紡績業の「一九二三年恐慌」を引き起こす一つの要因となった。このような性質をもつ「一九二三年恐慌」への対応をめぐる、中国紡績業界には両極分解の傾向が濃厚にあらわれてきた。

一つの方向は、中国農村の太糸需要がすでに限界に達したものと判断から、改良土布などの原料綿糸になる二〇番手超過の細糸に生産シフトをして、新たな市場を開拓しようとするものである。二〇番手超過の細糸は、農村の手紡では生産できないように、原綿コストの比率が低く、付加価値の高い製品であるところから、原綿の割高と手紡糸の反撃に由来する「一九二三年恐慌」を克服するのには、最適な選択であった。

いま一つの方向は、あくまでも農村市場向け太糸の生産を続けるために、紡績工場の建設をそれまでの沿海都市立地型から内陸立地型に改め、原料市場、販売市場との接近による流通経費の節減で手紡糸に対する競争力を強化して、太糸市場の維持、拡大を図ろうとするものである。

概していえば、前者の試みは資本力、技術力などを備えた日本資本の紡績工場（「在華紡」）が終始主導権を握って進め、後者の試みはもっぱら中国資本の紡績工場（民族紡）によって進められた。こうして中国紡績業界は「一九二三年恐慌」以降、細糸への生産シフトを推進する「在華紡」と太糸に特化した生産を続行する内陸部の民族紡に、両極分解する傾向が生じ、太糸に特化した初期段階の単層構造から再編期の「重層構造」への転換を開始したのである。

三 一九二〇年以降の綿花流通

「一九二三年恐慌」をはさんで、顕在化した中国綿花の需給逼迫と中国紡績業の重層化という二つの現象は、その後の中国の綿花流通にいかなる変化をもたらしたのであろうか。ここでは、一九二〇年代から三〇年代前半にかけての綿花流通の変化を、対外貿易と国内流通の二つの面から考察してみよう。

表一 4 中国の国別綿花輸入高

年	印 度		米 国		日 本		其 他		総 計 担
	担	%	担	%	担	%	担	%	
1912	97,124	33.2	141,200	48.2	14,063	4.8	40,558	13.8	292,945
1913	83,169	59.6	26,310	18.8	15,214	10.9	14,954	10.7	139,647
1914	50,766	39.7	44,865	35.1	20,882	16.3	11,389	8.9	127,902
1915	276,270	73.1	59,563	15.8	24,478	6.5	17,840	4.7	378,151
1916	289,852	69.9	30,797	7.4	47,384	11.4	46,425	11.2	414,458
1917	82,589	26.9	21,329	7.0	179,528	58.6	23,015	7.5	306,461
1918	18,364	9.6	11,665	6.1	128,222	66.8	33,637	17.5	191,888
1919	98,430	40.7	37,199	15.4	75,029	31.0	31,145	12.9	241,803
1920	418,964	60.9	34,049	4.9	161,978	23.5	73,505	10.7	688,496
1921	981,136	58.1	516,676	30.6	141,754	8.4	50,572	3.0	1,690,138
1922	1,370,069	73.7	155,319	8.4	302,895	16.3	29,587	1.6	1,857,870
1923	1,147,948	70.3	72,851	4.5	386,398	23.7	25,047	1.5	1,632,244
1924	669,267	54.3	107,180	8.7	426,541	34.6	28,487	2.3	1,231,475
1925	1,020,266	55.7	145,586	8.0	638,705	34.9	25,938	1.4	1,830,495
1926	1,529,033	54.7	506,424	18.1	733,964	26.3	26,197	0.9	2,795,618
1927	748,551	30.0	917,047	36.8	805,601	32.3	20,185	0.8	2,491,384
1928	981,673	50.8	489,230	25.3	447,735	23.2	14,652	0.8	1,933,290
1929	1,323,002	52.0	819,127	32.2	366,302	14.4	37,058	1.5	2,545,489
1930	1,941,681	55.8	1,143,874	32.9	350,591	10.1	45,078	1.3	3,481,224
1931	1,811,076	38.6	2,573,757	54.9	274,069	5.8	29,179	0.6	4,688,081
1932	426,014	11.5	3,102,351	83.4	88,934	2.4	102,230	2.7	3,719,529
1933	395,344	32.9	769,730	64.1	7,673	0.6	27,469	2.3	1,200,216
1934	505,625	43.7	583,748	50.4	1,576	0.1	66,714	5.8	1,157,663
1935	212,962	38.9	275,902	50.4	803	0.1	57,733	10.5	547,400
1936	205,599	56.9	94,161	26.1		0.0	61,381	17.0	361,141

資料) 方頭延『中国之棉紡織業』付表六、1933年以降は『内外綿業年鑑』昭和13年版付録内外綿業諸統計外國之部47頁。

1 綿花貿易の趨勢

十九世紀後半以来、中国はずっと綿花輸出国であったが、一九一九年（輸出一〇七万二千担、輸入二四万二千担）を最後に、一九二〇年（輸出三七万六千担、輸入六八万八千担）からは綿花輸入国に転じ、一九三六年まで入超が続いた。⁽¹⁾「黄金時期」以降、国内紡績業の飛躍的な発展に比して国産綿花の生産が順調に伸びなかったのが、最大の原因である。

表一四のように、一九二〇年までは最高でも四〇万担をわずかに超える程度にすぎなかった中国の綿花輸入は、二〇年六八万八千担、二一年一六九万担、二二年一八五万八千担とめざましく増加した。その国別内訳は必ずしも一定の傾向を示しているわけではないが、一九二〇年代前半はインド綿花の輸入が大宗を占め、後半からはアメリカ綿花の輸入が比

重を増して来る。したがって、一九二〇年以降の中国の綿花貿易は、一九二五、六年あたりを目処に二つの段階に區別して考えるのが、適当なように思われる。

一九二〇年以降、「黄金時期」の紡績工場建設ラッシュに歩調を合わせるかのように、まずインド綿花の輸入が急増した。インド綿花はアメリカ綿花に先立ち、一九一九年後半から暴落を開始していた関係から、一九二〇年にはいと、銀高要因もくわわって中国綿花に比べても割安感が強まった。⁽²⁾

その結果、インド綿花の輸入は二〇年四一万九千担、二二年九八万一千担、二二年一三七万担としりあがり急増した。「黄金時期」に進行した国産の紡績用綿花の絶対的な不足は、まずはとりあえず、中国の在来種綿花と性質を同じくするインド綿花の輸入急増で賄われたわけである。当時なお、農村市場向けの太糸生産に特化していた中国紡績業にとって、太糸紡出に適したインド綿花は中国綿花の代替品として最適であった。中国綿花相場が国際綿花相場に比して割高に転じた当時であつて、割安のインド綿花を手当することは、営業上必須の処置になった。

しかし、「黄金時期」後期からの中国綿花割高局面で、割安なインド綿花を手当することは、中国の紡績工場すべてに可能なわけではなかった。第一にインド綿花を輸入するに当たっては、綿花商社との緊密な連携と長期的な金融上の信用保証が不可欠であるが、多くの民族紡はそのような条件には恵まれていなかった。第二にインド綿花は、中国綿花に比べて色黒で塵埃が多い関係から、使用に当たっては高度な混綿技術と、整綿段階での特別な塵埃除去装置が必要であるが、やはり多くの民族紡はそのような技術と装置はもっていなかった。結局のところ、一九二〇年代前半に臨機応変に、割安なインド綿花の手当によって原綿コスト削減の利益を享受しえたのは、大半が「在華紡」に限られていた。

そのような状況は、表一五に示したボンベイ港積み出し綿花の対中国輸出における日本商社の取扱比率の変遷状況にも反映している。ボンベイ綿花の対中国輸出が大量化した一九二〇年以降、その中で日本商社が占める取扱比率は、三分の二強から次第に上昇し、中国綿花の割高感が極限に達した「一九二三年恐慌」の年には、ついに四分の三を占めるまでになった。この比

表—5 日本商社による中国向け印綿ボンベイ出荷高

年	東 棉		日 棉		江 商		其他日本商社		日本商社合計		総 計
	俵	%	俵	%	俵	%	俵	%	俵	%	
1920-21	85,388	27.9	60,116	19.6	7,750	3.7	55,041	18.0	208,295	68.1	305,948
1921-22	86,833	25.4	30,947	9.1	29,602	12.6	88,218	25.8	235,600	68.9	341,918
1922-23	90,766	25.9	63,308	18.1	51,017	19.5	57,169	16.3	262,260	74.9	350,016
1923-24	75,828	37.0	29,170	14.2	24,700	18.3	5,100	2.5	134,798	65.8	204,933
1924-25	87,534	26.7	78,833	24.0	40,500	19.6			206,867	63.0	328,209
1925-26	79,566	22.4	72,408	20.4	61,031	28.2	3,500	1.0	216,505	60.9	355,473
1926-27	67,941	34.3	58,882	29.7	30,650	18.0	12,810	6.5	170,283	86.0	198,118
1927-28	83,050	27.8	86,055	28.8	23,752	12.1	3,900	1.3	196,757	65.7	299,267
1928-29	90,882	30.9	50,900	17.3	25,600	15.2	500	0.2	167,882	57.0	294,325
1929-30	140,772	27.3	65,900	12.8	83,600	28.8			290,272	56.3	515,137
1930-31	67,207	15.7	35,542	8.3	58,750	36.4			161,499	37.7	427,927
1931-32	13,560	9.5	27,625	19.3	14,550	26.1			55,735	39.0	142,886

資料) 木下悦二「日本商社のインド綿花買い付けの機構」——『日印綿業交渉史』アジア経済研究シリーズ3 (アジア経済研究所 昭和35年11月) 88—89頁。

備考) 其他日本商社とは、横浜生糸、湯浅棉花、日清棉花、大阪棉花、帝国棉花、鈴木商店の七社である。

率がもつ重みは、ボンベイ港積み出し棉花の対日本向け輸出における日本商社の取扱比率が、一九一〇年代後半で六七・五—七五・五%であったことと対比すれば、自ずから推察できる。この時期は、日本紡績業においてもまだ太糸生産が主流で、インド棉花の重要性はなおいささかも低下していなかった。インド棉花手当の状況でいえば、一九二〇—二三年の「在華紡」はすでに、一九一〇年代後半における日本国内紡績業の水準に達していたことになる。原綿需給の面でも、「在華紡」は日本紡績業が国内における太糸生産の行き詰まりを、中国への生産拠点のシフトによって打開しようとする試みであったことがわかる。

だがその後、ボンベイ棉花の対中国輸出における日本商社の取扱比率は、一九二六—二七年に八六%まで一時的な急上昇を記録したこともあるが、この年は対中国輸出の総量自体が一九万八千俵と例年の半分近くに激減した例外的な年であって、全体的な傾向としてはやはり緩やかな低下を続け、さらに一九三〇年代に入ると三分の一近くにまで急激に低下した。その原因は、「一九二三年恐慌」以降「在華紡」が進めた経営戦略の転換にあったと考えられる。農村市場の太糸需要飽和が露呈した「一九二三年恐慌」を契機に、「在華紡」は既述のように、採算の悪化した太糸から農村市場の手紡糸と競合しない細糸への生産シフトを指向しはじめた。そのため、太糸用原綿であるインド棉花は、「在華紡」にとっては相対的に重要性が低くなりはじめ、

表一六 上海での42番手綿糸混綿例 (%)

(1)		(2)		(3)		(4)		(5)	
Middling	65	上米綿	40	永記靈宝	46	11/8" 米綿	60	上米綿	60
靈宝	25	中米綿	40	11/8" 米綿	30	靈宝	35	靈宝	40
StrictMiddling	10	メキシコ	20	恒利靈宝	30	通州	5		
				長絲黃美	4				

資料) 王子建・王鎮中『七省華商紗廠調査報告』(商務印書館 民国25年2月再版) 付録IX頁。

むしろなお太糸生産に特化していた民族紡にとってこそ、その営業成績の死命を制しかねないほどの重要性を持ちはじめたのである。このような傾向は、「在華紡」の高番手化が軌道にのりだした一九二五年以降に顕在化をはじめ、一九三〇年代にはいつて決定的になる。⁽³⁾

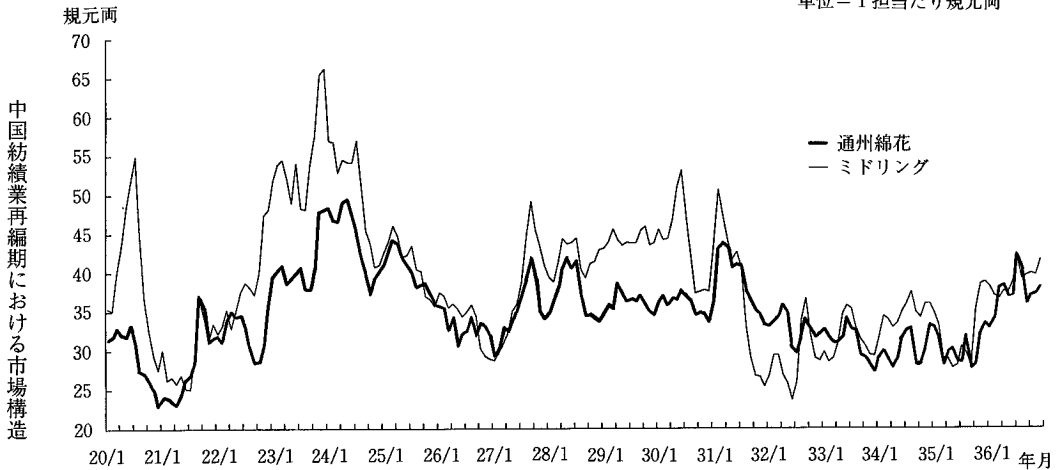
一九二〇年代の中国紡績業、就中「在華紡」の経営戦略におけるインド綿花の価値は、以上のように「一九二三年恐慌」をはさんで、大きく転変した。そしてこの変化が、ボンベイ港積み出し綿花の対中国輸出における日本商社の取扱比率を一九二三年以降の漸落から一九三〇年代の急落へと導いたのである。「在華紡」にとってインド綿花の価値が相対的に低下していったのに反比例して、細糸紡出に適したアメリカ綿花が重要性を増してきた。とりわけ一九二五年以降「在華紡」の高番手化が本格化しはじめると、細糸用良質原綿の絶対量が不足していた中国では、アメリカ綿花に対する需要が急増した。中国で生産された代表的な細糸は、改良土布の原糸に使用されることの多かった四二番手綿糸である。表一六の上海での混綿例からもわかるように、一九三〇年代に入っても、四二番手綿糸を生産するためにはアメリカ綿花が必要不可欠であった。

アメリカ綿花の中国への輸入高は、表一四のように一九二五年の一四万六千担から二六年、五〇万六千担、二七年九一万七千担と激増し、二八年にはいったん四八万九千担まで後退したものの、増加の基調は変わらず、三〇年には一一四万四千担と、ついに百万担の大台をこえた。

それ以前にも、一九二一年に一度、五一万七千担というアメリカ綿花の輸入が記録されたことがあるが、二五年以降の急増とはその事情を異にしていた。当時の中国における代表的な紡績用原綿であった通州綿花の担当たり上海相場と、ミドリングのニューヨーク相場(一ポンド当たりセント)に為替レートを掛け合わせて担当たり規元両に換算した値とを比較した図一七から、その経緯をうかがうことができる。

図-7 通州綿花とミドリリングの価格比較

単位=1担当たり規元両



資料) 通州綿花価格は、1925年までは森時彦『五四時期の民族紡績業』187-188頁、26年からは『中国棉紡績統計史料』124-125頁。ミドリリング価格は、『日本経済統計総観』(朝日新聞社 昭和5年5月)1270頁。ドルレートは、1930年までは羅志如『統計表中之上海』国立中央研究院社会科学研究所集刊第4号(南京 民国21年)109頁、31年からは『工商半月刊』第4巻第1号(民国21年1月)統計資料7-8頁、第5巻第1号(民国22年1月)55-56頁、33年からは中国銀行総管理処経済研究室編『中華民國二十四年全国銀行年鑑』(民国24年6月)F148頁、中国銀行経済研究室編『中華民國二十六年全国銀行年鑑』(民国26年10月)S148頁。

年毎にくわしく観察していくと、アメリカ綿花の暴騰と急激な銀安がかさなった一九二〇年七月には、ミドリリングの換算値は五五規元両に迫り、三一規元両の通州綿花とはかけ離れた高値にあった。それが、翌月からはじまったアメリカ綿花の崩落とともに、両者の価格差は急速に縮小し、折からの激しい銀安にもかかわらず、二一年六、七月には、一時的ながら二五両にまで下落したミドリリングの換算値がついに、二六―二七両の通州綿花よりも一―二両の安値をつける逆転現象が起こった。翌八月にはミドリリングの換算値の方が一両余り高くなるが、九、一〇月はふたたび通州綿花の方が割高に転じた。結局一九二一年の夏から秋にかけては、銀建て価格ではミドリリングの方が通州綿花よりも割安という、空前の事態が起こったのである。一九二一年の段階では、「在華紡」もふくめて中国紡績業はなお、二〇番手以下の太糸生産に特化していたのであるから、この年におけるアメリカ綿花の輸入急増は、もっぱら通州綿花よりも割安になったその価格に起因していると考えざるをえない。

上海の綿花市況でも、すでに一九二二年四―六月の段階で、「アメリカ綿花は担当たり二七両前後になった。その安値はほとんど空前のもので、各工場は争って購入し、その数量は非常に多い」と、この年のアメリカ綿花の輸入急増を予想させる観測をしていた。

そして九月になると、アメリカ綿花の輸入量はすでに、「累年のレコードを破り七万五千俵より十万俵に達し更に近き先物の契約巨額に上れり」と空前の規模に達した。市況ではその原因を、「昨年度に於ける支那棉の不足に因る所なるが他方支那棉花不足の結果として市価昂騰せるに米棉安値買なるに拠れり」とみなしていた。⁵⁾

一九二二年のアメリカ棉花輸入急増は、中国棉花の需給逼迫による騰貴とアメリカ棉花の暴落が一致した結果にほかならなかった。事実、ミドリリングと通州棉花の価格逆転現象が解消するとともに、アメリカ棉花の輸入は急減した。一九二二年夏から乖離しはじめた両者の価格差は、二三年一二月には一八両余りにまで広がり、一九二〇年頃の状態にもどった。この価格差の開きに、「一九二三年恐慌」の影響もくわわって、一九二三年のアメリカ棉花輸入量は、七万三千担にまで激減した。

このように一九二三年までのアメリカ棉花の輸入動向は、中国棉花との価格関係と密接な相関関係をたもっていた。ところがそれ以降になると、両者の価格関係だけは還元できないような局面が、いくつか観察されるようになる。図一七にたちもどつてみると、ミドリリングと通州棉花の価格関係は、一九二五年から二六年にかけて、極めて接近あるいは逆転さえしている時期もみうけられるが、一九二七年半ばから三一年初頭にかけての四年近くの間は、ミドリリング換算値の方がほぼ一貫して五一一〇両高めの状態がつづいていた。それにもかかわらず、逆に一九二六年以降のアメリカ棉花輸入量は、二八年のやや大きな反落をともないながらも、百万担の大台突破にむかって急増したのである。とくに一九三〇年には、ミドリリング換算値の方が最高で一五・五両余りも高くなり、輸入量が反落した一九二八年よりも価格の点ではアメリカ棉花はむしろ不利な立場にあつたはずであるが、その輸入量はかえって百万担をこえる史上最高を記録した。一九二七年から三〇年にかけては、価格関係と輸入量はむしろ反比例している感さえある。

一九二〇年代後半におけるアメリカ棉花輸入急増は、このように価格関係だけでは還元できない背景をもっていた。すでに再三指摘したように、一九二五年以降の「在華紡」を中心とする高番手化の進展は、高番手綿糸紡出用原綿に対する需要をいっきよに急増させたが、太过于短い纖維の中国産棉花はこの需要に應ずる条件を欠いていた。そのため、まずはアメリカ棉花の輸

入急増でこの不足を補うことになったのである。そしてアメリカ綿花による高番手綿糸生産が軌道にのったのちは、たとえアメリカ綿花の相場が高騰しても、もはや中国綿花にのりかえることはできず、高番手綿糸用原綿としてかならず、価格にかかわらず一定数量のアメリカ綿花を手当せざるをえなくなったのである。一九三〇年代にはいると、中国での二〇番手超過綿糸の生産比率は、「在華紡」では四〇%前後、民族紡でも一〇%前後に達した。生産量でも、二〇番手（厳密には二三番手）超過綿糸は三二年一四万八千担、三三年一三二万九千担を数えた。一九三〇年のアメリカ綿花輸入量、一一四万四千担は、ほぼこれに見合う数量である。

しかし一九三二年以降の様相は、一九二二年の再現を思わせるものがある。図一七に明らかのように、ミドリリングの換算値は、一九三一年に入って為替レートの銀安下げ止まりから、ニューヨーク綿花相場暴落の直撃をうけ、二月の五〇両余りから一〇月の二七両弱まで、ほぼ一直線に下落した。一方、通州綿花の方は、上海事変および長江中流域の大洪水の影響で、とくに暴騰が激しかった。そのため三一年七月には、通州綿花の四一両に対し、ミドリリングの換算値は四〇・五両とわずかに下回って逆転現象が起こった。その後は、通州綿花も下落しはじめたが、ミドリリングの暴落はそれをはるかに上回り、一〇月には通州綿花の三五・二五両に対し、ミドリリングは二六・七両まで下がり、両者の差は八・五両以上に開いてしまった。この逆転現象が三三年四月までつづいた結果、アメリカ綿花の輸入は、三一年は二五七万四千担と前年比二倍以上に増加し、三二年にはついに、三二〇万二千担に達し、輸入量のじつに八三%を占めるにいたった。⁶⁾一九三〇年代の二〇番手超過綿糸生産量と比べて、三一、三二両年のアメリカ綿花輸入量は、中国での細糸用原綿需要量をはるかに超えていた。湖南第一紗廠の例でもあきらかなように、多くの民族紡が大糸用にまでアメリカ綿花を購入したのである。そのため、ミドリリングと通州綿花の価格関係における逆転現象が解消した一九三三年以降は、アメリカ綿花の輸入はふたたび急速な減少の一途をたどることになった。

かくして中国へのアメリカ綿花の輸入は、「在華紡」を中心とする高番手化の動きが活発になった一九二〇年代後半から三〇年代前半にかけて、一時期を画する全盛をみたのである。アメリカ綿花の中国への輸入取扱い状況については、先のインド綿花

表一七 上海外国棉花輸入における日本商社のシェア
(1935年8月—1936年4月) 単位=俵

商社 棉花	日 棉		東 棉		江 商		三社合計		総輸入量 俵
	俵	%	俵	%	俵	%	俵	%	
米国棉花	12,750	33	15,900	41	7,438	19	36,088	94	38,355
印度棉花	19,050	29	11,977	18	6,950	11	37,977	58	65,227
埃及棉花	350	2	4,800	29	2,600	16	7,750	47	16,573
総 計	32,150	27	32,677	27	16,988	14	81,815	68	120,155

資料)『紡織時報』第1286号(民国25年5月28日)。

のように系統的なデータを用意することはできないが、一九三五年八月から三六年四月まで九ヵ月間の上海での状況を示す表一七で、その一端をうかがうことができる。

九ヵ月間の輸入総量がわずか一二万俵(一俵平均五〇〇ポンド)三・七五担として、四五万担に相当)にすぎないことから分かるように、この時期はすでに、中国国内におけるアメリカ種棉花栽培の普及と生産増加で、輸入外国棉花に対する需要は、最盛期の三一、三二年当時に比べかなり減少していた。したがって、このデータは一九三〇年代前半における外国棉花輸入動向の帰結を示すにすぎないことを承知した上で、観察する必要がある。この時点では、ふたたびインド棉花輸入量の方がアメリカ棉花よりも多くなっているが、注目すべきは日本の三大棉花商社の取扱比率である。インド棉花の場合、三大棉花商社を合計しても五八・三%にすぎないのに対し、アメリカ棉花では、東棉一社だけでも四〇%を超え、三社合計ではじつに九四・一%に達する。アメリカ棉花の中国への輸入は、ほとんど日本の三大棉花商社が独占していたといっても過言ではない。一九三〇年代の中国におけるアメリカ棉花の需要は、三一年から三二年にかけての極端な価格逆転現象の一時期には低番手用に当てられるケースもみられたが、基本的には高番手化の先端にあつた「在華紡」が中心であつたと考えてもよいであろう。

以上見てきたように、一九二〇年代から三〇年代前半にかけての中国棉花貿易は、ほぼ三点に要約できる特色をもっていた。第一には、いわずもがなのことではあるが、中国がそれ以前の棉花輸出国から輸入国に変わったことである。しかも第二にその輸入貿易において、一九二〇年代前半には紡績用棉花の絶対量不足から、中国の在来綿と性質を同じくするインド棉花が、そして二〇年代後半から三〇年代前半にかけては中国紡績業の高番手化に不可欠のアメリカ棉花が重要な意味をもつたことである。それぞれの段階で、中国棉花との価格差が極端な開きを生じた時には、輸入量が激増することもあつ

たが、その変化は大勢としては中国紡績業の発展段階と中国綿花の生産状況に相応するものであった。そして第三に、いずれの段階においても「在華紡」が先行したことである。日本紡績資本の对中国進出が、紡績工場ばかりでなく綿花商社を伴い、原料調達から製品販売にいたるまで一貫した体制をとりえたことが、それを可能にしたといえる。

総じていえば、一九二〇年代から三〇年代前半にかけての中国綿花貿易は、折から大規模な資本進出を遂行していた日本紡績資本が、終始その新たな方向を決定づける役割を果たしたのである。このような綿花貿易の趨勢は、中国紡績業の構造的な変化を反映したものであった以上、けっして貿易面のみ特有な現象ではありえなかつた。

2 国内流通の再編

日本紡績資本の先導による綿花流通の再編は、対外貿易だけにとどまるものではなく、中国国内の流通にもおよんだ。そのもつとも顕著な現象は、従来の上海、漢口、天津という三大綿花市場が国内紡績業の発展にともなう綿花需要の激増にこたえきれなくなつた結果、国内紡績用の優良綿花を供給する新しい三大綿花市場が、鄭州、濟南、沙市に形成されたことである。それぞれの市場について、その形成過程をできる限り計量的に追跡してみたい。

鄭州は、京漢線と隴海線の交差する交通の要に位置し、従来から質のよい陝西、河南綿花の集散地として注目を集めていた。その良質綿花を求めて、一九一九年には、上海の紡績企業家、穆藕初がこの地に資本進出し、豫豊紗廠を設立した。紡錘数五万錘を擁する一大紡績工場の設立は、綿花集散地としての鄭州の地位をいっそう重要なものにした。だが、一九二〇年代に入るまでは、その消費先は、地元を中心にほぼ華北地方にかぎられていた。

それが、「黄金時期」も後期になつて、先進地域における紡績用綿花の欠乏が顕在化しはじめた一九二一―二二年を境にして、鄭州綿花に対する需要は一気に高まつた。京漢線の便にめぐまれた漢口はもとより、遠く上海からも内外のバイヤーが殺到するようになった。とりわけ日本の商社の進出ぶりが、ひととき目立った。表一八は、日本の商社筋提供のデータによって作成され

表一八 鄭州出荷綿花の販売先

単位=担

販売先 年	鄭州	石家莊	漢口	上海	日本商社	計
1920-21	27,000	42,160	0	0	510	69,670
1921-22	68,000	105,400	83,300	102,000	57,800	416,500
1922-23	96,635	?	38,682	69,394	92,674	297,385
1923-24	48,950	68,700	96,700	165,442	123,294	503,086

資料) 東亜同文書院『支那調査報告』第20回第5巻第2冊第5編山西の棉花。
備考) 期間は綿花年(10月—翌年9月)。

た調査報告をまとめたものである。石家莊と表示した項目は、実際は石家莊を経由して天津、青島、さらには日本へと流通していた分をも含んでいる。ともあれ一九二〇—二一年までは、鄭州に集散する綿花は、一部日本にまで輸出されるケースもあったものの、ほとんどは地元鄭州の豫豊紗廠と、天津、青島などの紡績工場で消費されていたことになる。もっともその流通量は、一九二〇年がとくに綿花不作の年であったことも影響して、七万担足らずとごく少量であった。

このような鄭州市場の綿花流通状況も、翌一九二一年から二二年にかけてはその様相を一変させる。総流通量がいきよに四二万担にせまって、前年比六倍という激増ぶりをみせたこともさることながら、一九二〇—二一年には皆無であった漢口、上海の綿花商、民族紡が、それぞれ八万三千担、一〇万二千担という大量の買い付けをはじめたこと、さらに上海「在華紡」へ供給するための日本商社の買い付けが、前年の試験的とも思える五一〇担から、五万八千担近くに激増したことなどが、とくに目を引く。翌一九二二—二三年には、「一九二三年恐慌」の本格化にともない、武漢、上海の民族紡が買い付けを控え、総流通量も三割近く減少するが、日本商社の買い付けは引き続き急増した。翌一九二三—二四年になると、武漢、上海の民族紡は大幅に買い付け量を増やし、さらに買い付け量を増した日本商社と合わせて、三者の合計は三八万五千担を超え、総流通量の四分の三以上が上海、漢口に積み出されるにいたった。ある記述は、この活況を「民国一二、三年より交通の便利によりて、綿業すなわち蒸蒸日上の勢あり」と伝えている。⁽⁷⁾

一九二三年一〇月—二四年三月の半年に限れば、表一九のようにさらに細かく各民族紡および綿花商の購入量も判明する。地元の豫豊を別格とすれば、一万担以上を購入する大口消費先は、華北の四工場に対し、武漢は三工場、一商店、上海およびその付近は、六工場、二商店で、表一八の分布にほぼ対応する構成になっている。逆にいうと、武漢、上海の民族紡にとって、鄭州

表一 9 1923年10月—24年 3月鄭州綿花の華商購入状況

単位=担

鄭州	豫豊	48,952	上海	厚生	19,840
衛輝	華新	15,800		永安	17,100
彰德	広益	3,000		溥益	12,390
石家莊	大興	17,300		鴻裕	12,062
天津	華新	4,700		申新	11,350
	裕元	2,200		緯通	7,892
	宝成	1,100		三新	7,350
濟南	魯豊	11,100		恆豊	3,600
青島	華新	12,800		宝成	2,000
	小計	116,952		万豊	14,960
漢口	第一	27,400		義盛豊	11,480
	楚安	22,080		榮茂	4,860
	裕華	19,040		振興	4,360
	振襄	1,200		瑞泰	2,000
	□松	15,180	無錫	業勤	9,400
	□泰	6,900		豫康	7,450
	□茂	600		慶豊	6,600
長沙	華美	4,300	常州	大倫	10,720
	小計	96,700	小計		165,414

資料) 東亜同文書院『支那調査報告』第20回第5巻第2冊第5編山西の棉花。

から供給される綿花は、いまや原綿手当のうえて欠くことのできない存在となったのである。実際、武漢でトップの第一と、上海でトップの厚生についてみると、一九二四年における両社の綿花消費高は、それぞれ一萬担、七萬二千担と報告されているから、鄭州綿花は、わずかに半年分で（もっとも綿花の手当はこの半年に集中するのが普通であるのだが）、その四分の一以上をまかなくなったことになる。民族紡への供給状況は、「一九二三年恐慌」を境にして、その比重を上海、武漢へと急速に移動させたのである。

一方日本資本の進出については、日信、東棉、武林、吉田、隆和といった綿花商社五社のシェアは、表一〇のように、毎年の詳細な数字が残っているものの、商社から「在華紡」への供給量については、民族紡のようないくつかの内訳は判明しない。最初一九二〇—二一年に、試験的に鄭州市場に進出したのは、東棉であったが、本格化した段階でまず圧倒的なシェアを占めたのは、日本棉花株式会社漢口支店の日信洋行であった。その後東棉も、急速に取扱量を伸ばした結果、一九二三—二四年には、日信と東棉だけで、一〇万担をはるかに超す取扱量を数えるようになり、地元の豫豊紗廠を第二位に挟んで、鄭州市場におけるビッグスリーをかたちづくるにいたった。「在華紡」の代理人である日本商社が、民族紡以上に積極

表一10 鄭州での日本商社綿花取扱い量

単位=担

年	商社	日信	東棉	武林	吉田	隆和	合計
1920-21			510				510
1921-22		39,100	10,200	8,500			57,800
1922-23		50,344	39,780	2,550			92,674
1923-24		58,925	45,643	11,976	3,250	3,500	123,294

資料) 東亜同文書院『支那調査報告』第20回第5巻第2冊第5編山西の棉花。
備考) 期間は綿花年(10月—翌年9月)。

表一11 鄭州入荷綿花の生産地

単位=担

年	産地	陝西綿	山西綿	河南荒毛	太康綿	洛陽細毛	靈宝・閔郷	計
1919-20		188,000	135,000	42,600	5,000			370,600
1920-21		35,500	18,500	8,520	6,000		1,350	69,870
1921-22		220,000	137,000	30,000			29,000	416,000
1922-23		153,000	88,400	45,430	20,000	30,000	45,000	381,830
1923-24		300,000	14,000	70,000	45,000	75,000	65,000	569,000

資料) 東亜同文書院『支那調査報告』第20回第5巻第2冊第5編山西の棉花。
備考) 期間は綿花年(10月—翌年9月)。

的に良質綿花をもとめて鄭州市場への進出を進めていたことをうかがわせる。

鄭州市場はかつての地元中心の地方的な市場から、上海、漢口に直結する全国的な市場に生まれ変わった。先進地域の紡績工場への原綿供給市場に性格をあらためつつあった鄭州市場では、消費先での趨勢に対応して、その取引綿花の種類にも明確な変化が生じていた。もっとも大きな変化は、表一―に鮮明に表れているように、鄭州が全国的な市場に変容していったのにつれて、山西綿花の入荷が急減した反面、靈宝・閔郷産の綿花、洛陽産の細毛綿花が急増した。よく知られているように、靈宝綿はアメリカ種の移植綿花で、中国最高の良質綿花という誉れが高かった。この時期、高番手綿糸への生産シフトを積極的に推進しようとしていた上海「在華紡」にとって、繊維の細くて長い靈宝綿は、中国国内で手当できる最高の細糸用原綿として争奪の的となった。

日本商社が試験的に鄭州市場に進出したのと同じ一九二〇―二一年に、靈宝・閔郷産の綿花が、同じく試験的に一三五〇担、鄭州市場に出荷されはじめた。そして、翌一九二二―二三年に日本商社の進出が本格化する、靈宝・閔郷産綿花の出荷も本格化して二万九千担を数え、その後も毎年五割増しの増加を続けた。靈宝綿と同じく、アメリカ種の移植綿花である洛陽細毛、太康綿なども、ほぼ同時期に鄭州市場への出荷を本

格的にはじめた。一九二二—二四年には、靈宝・閔郷綿、洛陽細毛、太康綿、三者の合計は一八万五千担にのほり、鄭州流通綿花のほぼ三分の一を占めるにいたつた。かくして鄭州は、高番手綿糸への生産シフトという上海「在華紡」の企業戦略にとって、欠くことのできない細糸用原綿の供給市場に位置づけられることになった。

上海、漢口への原綿供給市場となつた鄭州は、上海、漢口との経済的結びつきをつよめ、綿花相場の動向も上海、漢口の綿花相場と密接に連動するようになった。しかし言うまでもなく、一九二〇年代は内戦の頻発した時代であつた。度重なる戦闘は、形成されつつあつた地域市場間の商品流通網をくりかえし寸断した。綿花流通を軸に出来上がった鄭州と漢口あるいは上海との間のルートも、たびたび途絶することになった。そのたびに、積み出し不能に陥つた鄭州の綿花相場は、大暴落に見舞われた。例えば、一九二七年夏、陝西とのルートが再開した鄭州には、隴海鉄道沿線の綿花が順調に入荷するようになった反面、漢口、上海へのルートは、途絶したままであつたところから、上海市場の一担当り四十余両という相場に対し、鄭州の相場は、二十四、五両とほとんど半値であつたといふ⁽⁸⁾。この事態は、内戦が中国経済にいかん深刻な影響を及ぼしたかを、よく物語っている。しかしそれ以上に注目すべきは、上海、漢口への流通ルートが途絶すると、ただちに相場が上海の半値近くに下落するほどに、上海、漢口など先進地域の需要動向が鄭州の綿花相場を支配していた点である。一九二〇年代の鄭州綿花市場は、すでに上海、武漢両地の紡績工場の需要なしには成立ちえないまでに、その中間市場としての性格を強めていたのである。

つぎに済南の場合はどうであつたらうか。山東省の中央部に位置する済南は、山東綿花のみならず、河北、河南綿花の集散にも、有利な立地条件を備えていた。そのため、済南は紡績用綿花の需要が急増する以前から、すでに相当量の綿花が集散する綿花市場として機能していた。

一九一五年のごく大まかな調査によれば、済南には東臨道から八万六千担、済南道から四万担、済寧道から一万六千担、直隸南部から六万担、合計二〇万二千担の綿花が入荷し、青島に七万九千担強、青島以外の膠濟鉄道沿線に三万八千担強、済南以南の津浦鉄道沿線に三万担が出荷され、地元で残余の五万四千担強が消費されたという。最大の出荷先である青島の方は、多くが

表—12 済南駅綿花積み出し高

年	仕向先		青島向け				合計
	膠済線沿線向け		地元消費		輸移出用		
	担	%	担	%	担	%	担
1912	59,000	37.8	27,430	17.6	69,570	44.6	156,000
1921	56,882	25.7	147,104	66.4	17,462	7.9	221,448
1922	71,284	30.3	129,216	54.9	34,951	14.8	235,451
1923	19,333	6.7	222,095	76.8	47,670	16.5	289,098

資料) 1912年は、『大日本紡績聯合会月報』第261号(大正3年5月25日)42頁,その他は,神戸高等商業学校『大正13年夏期海外旅行調査報告』269頁。

輸出あるいは移出されたものと見込まれる(一九一五年の青島海関統計に計上されている輸出綿花は、四万一千担弱であった⁹⁾)。華北に紡績業が勃興する以前においては、済南は在来綿業向けと輸出向けでほぼ二〇万担が集散する市場規模をもっていたのである。

呉知の研究によれば、このような済南市場の規模に大きな変化が起こったのは、やはり「黄金時期」以降のことであったという。呉知の示す数字では、一九〇九年堂邑の花販、王協三なる者が復成信花行を設立したのを嚆矢として、一九一九年までには五、六軒の花行ができたが、まだ正式の取引市場はなく、販路は日本の大阪だけで、取扱い量も一〇万担にすぎなかった。それが「黄金時期」になって、済南に魯豊紗廠、青島に華新紗廠が相次いで建設された結果、一九二一年には花行は十数軒に増え、取扱い量は三十数万担に急増した。その後さらに上海の申新紗廠が済南からの綿花購入を始めたこと、青島に「在華紡」が乱立したことなどが重なって、一九二四年には、花行は二十数軒、取扱い量はいっきよに五〇万担を超えた。

しかも注目すべきは、紡績用良質綿花に対する需要の急増から、一九二三、二四年を境にアメリカ種綿花の栽培が普及し始め、二六年には早くもアメリカ種綿花が市場取引の主流を占めるようになったことである。そして一九二九年には済南の綿花取扱い量は、ついに八〇万担にも達したが、そのうち在来種の荒毛が占める割合はわずか二、三割に低下したという¹⁰⁾。このような変化は、済南綿花の出荷先を示した表一二にもあらわれている。一九一二年には、済南駅から鉄道で出荷された綿花は、一五万六千担であったが、膠済線沿線の農村で五万八千担が消費され、青島まで送られたのは、九万七千担にすぎず、しかもそのうち輸出

にまわされたのが七万担近くに達したので、青島の地元消費は、二万七千担のみという計算になる。膠済線沿線の在来綿業と海外、とくに日本における需要が、済南綿花をほとんど消化していたわけである。それが、青島に紡績工場が乱立しはじめた一九二〇年代にはいると、済南綿花の流通状況は一変する。最後の年の一九二三年についてみれば、積出高は二八万九千担にのぼり、一九二二年に比べほぼ倍増した。より大きな変化は出荷先で、膠済線沿線農村の消費分は二万担を割り、青島からの輸分も四万八千担弱に減少したのに対し、青島地元消費分だけは二万二千担に激増した。

こうして済南の綿花市場は、一九二〇年以降青島の紡績工場を最大の顧客として急速な成長を遂げていく。その結果、山東の綿花流通は済南から青島にいたる膠済線を大動脈として、青島の紡績工場に流れ込むようになった。その帰結として一九三五—三八年における山東綿花の流通状況を表一三に示すと、山東綿花の出回り高は一九三五年一〇月—三六年九月の一年間が一三〇万担弱、三六年一〇月—三七年八月の一ヶ月間が一八〇万担余りで、そのうち七割—八割が済南に、二割—二割五分が張店に出回った。ここから、済南紡績工場の消費分と上海向け鉄道輸送分の合計、四三万四千担—四四万八千担を除いたすべてが、青島に送られ、大部分が青島の紡績工場で消費された。青島での消費分は、山東綿花出回り高の七割前後にのぼった。

青島での消費状況については、一九三六年度の分を表一四に示した。綿花年によった表一三とは、やや出入りがあるが、青島に供給された綿花は、一四八万担にのぼり、そのうち山東綿花は一八万担で八割を占めた。これらの綿花の最終的な取扱い業者は、すべて日本資本の「洋行」（商社）で、中国資本の花行が「在華紡」に売却する場合も、「総テ洋行ヲ通シテ為サレル」ことになっていた。⁽¹⁾ここでも日本の三大綿花商社の取扱量は、一〇〇万担にのぼり、三分の二以上を占めた。青島からさらに、日本、上海などに輸、移出される分は一二%強にすぎず、青島の紡績工場、とりわけ「在華紡」の消費分が八二%弱に達した。

一九二〇年代から三〇年代前半にかけて、済南市場を中心に拡大の一途をたどった山東の綿花流通は、おもに青島「在華紡」への原綿供給を軸に形成されたのである。

表—13 1935—38年山東の綿花流通

供給元

項目		期間		1935年10月—36年9月		1936年10月—37年8月		1938年1月—38年10月	
		担	%	担	%	担	%		
山東綿花	濟南	1,015,500	57.1	1,305,000	60.5	126,600	26.0		
	張店	247,000	13.9	443,000	20.5	9,000	1.9		
	高密	25,000	1.4	45,000	2.1	5,400	1.1		
	周村	10,000	0.6	30,000	1.4				
	徳県					255,000	52.5		
持ち越し分		175,000	9.8	50,100	2.3	50,000	10.3		
輸移入綿花	米綿	2,800	0.2	4,100	0.2				
	印綿	14,400	0.8						
	上海漢口綿	96,700	5.4	124,200	5.8	5,000	1.0		
	天津綿	34,200	1.9	9,400	0.4				
	靈宝綿	155,300	8.7	133,200	6.2				
	海州綿	3,000	0.2	14,400	0.7	35,000	7.2		
合計		1,778,900	100.0	2,158,400	100.0	486,000	100.0		

需要先

項目		期間		1935年10月—36年9月		1936年10月—37年8月		1938年1月—38年10月	
		担	%	担	%	担	%		
輸移出	日本向	42,000	2.4	87,000	4.0	67,400	13.9		
	海路上海向	10,000	0.6	76,000	3.5	43,600	9.0		
	鉄道上海向	287,800	16.2	259,000	12.0				
	海州向			5,000	0.2				
	天津向							240,000	49.4
	満州向							26,500	5.5
	朝鮮向							1,300	0.3
青島紡	山東綿花	923,000	51.9	1,218,000	56.4	20,000	4.1		
地元青島紡	其他綿花	306,000	17.2	285,000	13.2				
済南紡	山東綿花	160,000	9.0	175,000	8.1	80,000	16.5		
持ち越し分		50,100	2.8	53,400	2.5	7,200	1.5		
合計		1,778,900	100.0	2,158,400	100.0	486,000	100.0		

資料) 南満州鉄道株式会社調査部「北支棉花綜覧」(日本評論社 昭和15年5月) 349—352頁。

備考) 1938年の10カ月間は戦時であって、戦前とは様相が一変している。この年の天津向け移出は徳県から直接送られた。

表—14 1936年青島綿花流通状況

綿花生産地				取扱商社			消費先			
省・国内外	地方	千担	%	商社	千担	%	種別	会社等	千担	%
省内	済南	730	49.3	東棉	450	32.1	在華紡	公大	280	18.9
	張店	400	27.0	日棉	350	25.0		大日本	260	17.6
	高密	30	2.0	江商	200	14.3		内外	230	15.5
	周村	20	1.4	東裕	100	7.1		富士	100	6.8
	小計	1180	79.7	瑞豊	100	7.1		日清	80	5.4
省外	上海	110	7.4	三菱	100	7.1		長崎	80	5.4
	天津	22	1.5	伊藤忠	100	7.1		豊田	80	5.4
	海州	153	10.3	一郡	α			上海	80	5.4
	小計	285	19.3	総計	1400	100.0		同興	20	1.4
海外	米国	3	0.2					民族紡	華新	90
	印度	12	0.8				小計	1300	87.8	
	小計	15	1.0				移出	上海	80	5.4
総計		1480	100.0				輸出	海州	10	0.7
							小計	180	12.2	
							総計	1480	100.0	

資料) 満鉄北支事務局調査部編『北支主要都市商品流通事情』第八編青島(昭和14年4月)60—67頁。

最後に沙市の状況をみておこう。かつて「華西のマンチエスター」と称された沙市は、十九世紀には、揚子江上流地方への綿花、綿布の供給を、一手に引き受ける集散市場であった。一八九〇年代に、インド綿糸によって四川を中心とするその市場を奪われた沙市は、原料綿花の積出港に転身するかに思われた。事実、二十世紀初頭には、日本の商社が駐在員を派遣して、日本綿糸とのバター取引で、沙市の綿花を日本へ積み出そうとしたこともあった。しかし、揚子江上流への綿花積出港としての立地条件は、そのまま揚子江下流への積み出しにもいかせるわけではなかった。四川への綿花積み出しは、減少傾向にはあったが、依然として存続した。一方、揚子江下流への積み出しは、沙市を経由することなく、漢口へ直接おくられた。そのため一九二〇年代に至るまで、沙市から海関経由で移出される綿花は、ほとんど皆無に等しかったのである⁽¹²⁾。

このような状況に変化があらわれたのは、やはり「黄金時期」後期以降の綿花価格高騰がきっかけであった。綿花価格の高騰と紡績用良質綿花に対する需要の急増は、

それまで胡麻、大豆などの産地であった公安、石首、松滋などの各県にアメリカ種綿花の栽培を普及させた。一九二三年の沙市『海関報告』は、「今年とくに（綿花の）生産高が多い原因は二つある。第一は、以前胡麻、大豆、コーリヤンなどを植えていた地方が、今年も多く綿花に代えたこと。第二に、天候が温順で、収穫された綿花の質がきわめてよく、一担当り去年より一〇元も高い四―五〇円で売れたこと」と伝えている。¹³⁾

同じ時期の日本における報道でも、沙市周辺でのアメリカ種綿花栽培の増加に注目し、「毎年作付地畝の増加及土花（在来種にして蒲団棉用）の栽培減少し細毛にして紡績に適する洋花（米国種棉）栽培の傾向著しきものと依り漸次輸出向棉花の増加を来し居り」との指摘があった。ここでいう「輸出向棉花」とは、海外輸出用よりもむしろ国内移用の棉花であったと考えられる。

沙市における日本の棉花商社の買い付け活動も、二〇世紀初頭の挫折以来長く中断していたが、やはり紡績用優良棉花の移出増大に歩調を合わせるように、活発化しはじめた。沙市に進出した日本の棉花商社は、日信、吉田、瀛華および武林の四社であった。これら四社はいずれも、もともとは漢口に本拠をおく商社であったが、一九二三年の旅大回収運動の日貨ポイコットで「漢口は排日尚熄まず同地にて棉花入手困難なるのみならず漢水上流樊城老河口方面亦同様状態にあり」という苦境にたたされたことから、ここ沙市とさきの鄭州に買い付けの拠点を移さなければならぬという事情もあつた。¹⁴⁾

日本商社の進出による紡績用優良棉花の争奪は、沙市周辺でのアメリカ種棉花への転換をより促進したようである。沙市周辺の七県では、一九二三年ですでに、アメリカ種棉花の生産が棉花総生産量の四八%を占めていたが、その後も増加しつづけ、二八年には九八%にも達し、アメリカ種棉花の生産では、湖北省全体の三分の二近くを占める一大生産地に発展した。その結果、沙市は一九二八年に七〇万担を越す棉花を武漢、上海の紡績工場に移出し、中国第三の棉花積出港に急成長した。

上海、漢口、天津という従来の三大棉花市場が、海港あるいは河港に位置し、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、日本を中心とする外国への輸出を契機に大きな発展を遂げたのに対し、鄭州、濟南、沙市という新しい三大棉花市場は、河港の沙市を

除いては鉄道の要に位置し、「黄金時期」以後の国内紡績業の飛躍的な発展、とりわけ日本紡績資本の雪崩的な対中国資本進出にともなう紡績用優良綿花の需要増大を背景に形成されたのである。

3 綿花市場の「住み分け構造」

上海、武漢、天津、青島の四大紡績工業地帯における旺盛な原綿需要は、従来の三大綿花市場の枠をこえて、新たな綿花流通網の形成を促した。武漢、天津、青島では、近隣に綿花の大生産地が控えている上に、紡績工場の生産規模も数十万担から百万担を超える程度であった関係から、その流通網も当該の省から近隣の省におよぶ程度の地域的な規模にとどまった。それに対して上海は、江蘇という有数の綿作地帯に立地してはいたものの、内外資本の紡績工場における原綿需要は、一九三〇年の時点ですでに五〇〇万担に迫る膨大な量で、江蘇の綿花生産量をはるかに超え、しかも日本の綿花商社に支援された「在華紡」が、積極的な原綿手当を展開したところから、その綿花流通網は、北は河北、山東から、西は湖北、陝西にいたる全国的な規模におよんだ。

上海紡績業の原綿手当状況については、一九三五年末から三六年初にかけてのわずか五カ月分にすぎないが、表一五のようなデータが残っている。まず「在華紡」と民族紡に大別して、それぞれの原綿手当の特色を列挙すれば、ほぼ次の三点を指摘できる。

第一は、細糸用綿花の占める比率である。ここではあくまで一つの目安にとどまるが、それぞれの綿花を便宜的に、二〇番手超過の細糸用綿花と、二〇番手未満の太糸用綿花にわけた。輸入分では、インド綿花を太糸用、それ以外を細糸用とし、国産分では、靈宝綿、陝西綿と各地のアメリカ種綿花を細糸用、それ以外を太糸用とした。

「在華紡」では、靈宝綿の四万俵余りを中核に、天津アメリカ種綿花、アメリカ綿花などを加えて、合計で六万四千俵余り、全体の四四％近くを占めていた。一方民族紡では、三六年三月に一万俵を超す靈宝綿を手当したのが目立つ程度で、細糸用綿花

の合計、二万二千俵は、「在華紡」の三分の一にすぎず、比率も一七・五%にとどまった。ちなみに後出の表一九によると、一九三三年の上海民族紡における二〇番手超過綿糸の生産比率は一八・二%で、原綿手当の状況にほぼ一致している。原綿手当の面からも、高番手化の進展における「在華紡」と民族紡の格差が確認できる。⁽¹⁵⁾

第二は、遠隔地産綿花の占める比率である。いまかりに、通州綿、太倉綿、北市綿の三種を地元産綿花、それ以外を遠隔地産

(1935年11月—36年3月) 単位=俵

種類	民 族 紡					総 計	%
	11月	12月	1月	2月	3月		
アメリカ綿	500				700	1,200	0.95
エジプト綿						0	0.00
アフリカ綿						0	0.00
靈宝綿	2,500	150	752	1,374	10,337	15,113	12.02
陝西綿	944					944	0.75
天津米種	200	998	2,130			3,328	2.65
山東米種		320	870			1,190	0.95
漢口米種	210					210	0.17
通州米種		100				100	0.08
細糸用棉花	4,354	1,568	3,752	1,374	11,037	22,085	17.57
印度綿					16,139	16,139	12.84
天津荒毛	320	196	652	1,765	1,092	4,025	3.20
山東細毛		2,300				2,300	1.83
山東荒毛		146	130	260	825	1,361	1.08
彰德綿				100		100	0.08
鄭州綿			100	1,417	1,387	2,904	2.31
漢口細毛	2,599	2,698	360			5,657	4.50
漢口荒毛		200	360	1,527	3,806	5,893	4.69
沙市綿		1,403	1,650	1,922		4,975	3.96
九江綿			1,200			1,200	0.95
安慶綿			1,400	220	158	1,778	1.41
寧波綿			5,000			5,000	3.98
通州綿	300	6,487	3,200	3,065	7,204	20,256	16.11
太倉綿		320	1,600	1,725	553	4,198	3.34
北市綿	8,900	7,000	3,860	2,110	5,973	27,843	22.15
太糸用棉花	12,119	20,750	19,512	14,111	37,137	103,629	82.43
総 計	16,473	22,318	23,264	15,485	48,174	125,714	100.00

1月20日, 2月10日, 3月5日, 4月2日)。

綿花と区分すると、「在華紡」では地元産が一万六千俵足らずで、全体の一〇・八%にすぎないのに反し、民族紡では地元産が五万二千余俵で、全体のじつに四一・六%を占めた。「在華紡」が、細糸用綿花をはじめとする紡績用優良綿花を求めて、全国的な規模で積極的な原綿手当を展開していたのに対し、民族紡の方は、江蘇綿花の原料立地から成長した上海紡績業の本来的な体質を、なお色濃く残しており、原綿手当の全国的な展開では「在華紡」に相当の遅れをとっていたのである。

第三は、原綿手当の弾力性である。

表一 15 上海在華紡と民族紡の使用原綿内訳

種類	在 華 紡					総 計	%
	11月	12月	1月	2月	3月		
アメリカ綿	1,000	1,700	600		2,500	5,800	3.98
エジプト綿	550	150	300	100	800	1,900	1.30
アフリカ綿			100			100	0.07
靈宝綿	200	4,360	2,901	8,774	23,873	40,108	27.50
陝西綿	200			2,300		2,500	1.71
天津米種	6,962	1,760	2,575			11,297	7.75
山東米種	1,150	205	200			1,555	1.07
漢口米種	104					104	0.07
通州米種		759				759	0.52
細糸用棉花	10,166	8,934	6,676	11,174	27,173	64,123	43.96
印度綿				1,000	56,150	57,150	39.18
天津荒毛	172	105		2,429	1,039	3,745	2.57
山東細毛						0	0.00
山東荒毛			1,223	700	200	2,123	1.46
彰德綿				495		495	0.34
鄭州綿			40	797		837	0.57
漢口細毛	136	800				936	0.64
漢口荒毛				100		100	0.07
沙市綿		100		500		600	0.41
九江綿						0	0.00
安慶綿						0	0.00
寧波綿						0	0.00
通州綿	1,800				200	2,000	1.37
太倉綿	500			600		1,100	0.75
北市綿	7,300		1,000	3,000	1,347	12,647	8.67
太糸用棉花	9,908	1,005	2,263	9,621	58,936	81,733	56.04
総 計	20,074	9,939	8,939	20,795	86,109	145,856	100.00

資料)『紡織時報』第1242, 1254, 1258, 1265, 1272号(民国24年12月9日, 民国25年)

「在華紡」の原綿手当は、三六年一月が最少で九千俵弱、同年三月が最多で八万六千余俵と、最多と最少では一〇倍近くの開きがあった。一方、民族紡の原綿手当は、三六年二月が最少で一万五千余俵、翌三月が最多で四万八千余俵と、最多と最少の開きは三倍強にすぎない。

日本紡績資本が、一年単位の長期的な原綿手当で原綿コストの削減に成功し、インド綿花やアメリカ綿花を本国の企業よりもむしろ割安な価格で購入していたことは、よく知られているところである。最多と最少が一〇倍近くも開いていた原綿手当

の状況からみると、「在華紡」も日本国内の経験にならって、豊富な資金力をもとに相場が底値の時に大量の綿花を購入して、ストックする弾力的な原綿手当を実行していたものと想定される。

これに対して、民族紡の方は、かつて「黄金時期」までは、「循環手当法」と称される自転車操業のような原綿手当法が普通であったが、表一五の弾力性の弱い原綿手当の状況からみると、一九三〇年代になってもそのような傾向がまだ残っていたよ

うである。民族紡は、「在華紡」に比べ流動資金が不足し、綿花の長期にわたるストックを支えることができないところから、短期的な原綿手当による「その日過ぎの経営」をよぎなくされていたのであろう。民族紡の購入綿花が四〇%以上も地元産綿花で占められていたことも、このような原綿手当の反映と考えてよいだろう。⁽¹⁶⁾

以上、三点にわたり、「在華紡」と民族紡の相違に重点をおいて観察してきたが、両者の相違を超えた全体的な傾向としては、上海紡績業の優良綿花に対する旺盛な需要が、中国綿花の流通状況を全国的な規模で再編成した点を指摘しておかねばならない。「一九二三年恐慌」以降の期間を通じて、高番手化の面で格差が広がったのは、「在華紡」と民族紡の間だけではなく、民族紡の中でも上海所在の工場と地方所在の工場の間では、一九二〇年代末から三〇年代にかけて開きが出はじめた。地方の民族紡はほとんどが、手紡糸の代替品となる二〇番手以下の太糸生産に特化していた感がある。この二重の格差が相乗して、上海紡績業と地方紡績業とでは、生産綿糸の平均番手に大きな開きが生じた。

その結果、上海紡績業と地方紡績業とでは、当然消費する原綿の構成にも大きな相違がみられるようになった。地方紡績業が従来通り、おもに地元で中国在来種の太糸用綿花を手当していたのに対し、外来種の紡績用優良綿花、とりわけ二〇番手超過の細糸も紡げる繊維が長くて細い綿花は、上海紡績業が全国からくまなく吸い上げるルートが形成された。表一五のように、揚子江流域の綿花から、陝西、河南、河北、山東四省の綿花にいたるまで、アメリカ種綿花および紡績用に適した細毛の綿花が、既述の新しい三大綿花集散市場あるいは漢口、天津を通じて、上海に流入したのである。

かくして、「一九二三年恐慌」以降における中国の綿花流通は、「在華紡」を頂点とする上海紡績業が、新、旧の三大綿花市場を通じて、優良綿花を全国から選別的に吸い上げるようになったことから、上海を最終市場とし、鄭州、濟南、天津、沙市、漢口を中間市場とする全国的な市場のネットワークが形成された反面、優良綿花を産出しない地方市場はそのネットワークから外れた周辺に孤立的に存在する状態が生み出された。中国国内市場には、上海に直結する市場と上海から隔絶した市場が並存する、いわば「住み分けの構造」が形成されるにいたったのである。

四 再編期の市場構造と湖南第一紗廠

原料綿花と製品綿糸の両面で、中国市場の再編がすすむにつれ、中国紡績業は全国的な市場の統一化と重層化という、一見矛盾する二つの傾向が混在する複雑な様相を帯びるようになった。「一九二三年恐慌」以降における中国紡績業界のこのような状況は、一九二〇年代後半における内陸民族紡、とりわけ湖南第一紗廠の「黄金時期」形成に、いかにかわつたのであろうか。中国紡績業再編期の市場構造という枠組みのなかで、湖南市場の占める位置を鮮明にしていく作業を通じて、この課題に対する一つの試案を示すことにしたい。

1 湖南綿糸市場の構造

「黄金時期」以降においても湖南の機械製綿糸市場は、ほかの内陸地方と同じように、農村在来織布向けの太糸が流通の大部分を占めた。「黄金時期」までは、外国綿糸の輸入が主で、最高の年（一九一四）には、一万七千担弱を数えたが、一九二〇年代にはいると、上海綿糸および武漢綿糸の移入が急速に増加し、二三年には国産綿糸の移入が一五万担に迫った。その市場規模は、年によって増減はあるものの、国産と輸入を合わせて一五万担程度であった。

一九二一年三月から断続的ながら操業にはいった湖南第一紗廠は、「一九二三年恐慌」以降の「逆シエール」という原料立地、販売立地の地元紡績業に有利な市場環境のもとで、外来の綿糸に独占されていたこの太糸市場を奪回しながら、その販売市場を確保していった。操業開始以来、湖南第一紗廠の生産する綿糸は、表一六のように、時として一〇番手あるいは二〇番手が加わることもあったものの、手紡糸の代替品として普遍的であった一六番手がやはり圧倒的な割合を占めた。まさしく湖南第一紗廠は、湖南農村の太糸市場をターゲットとして、誕生し、成長したのである。

表—16 湖南第一紗廠綿糸番手別生産高

年	10番手		16番手		20番手		合 計 梱
	梱	%	梱	%	梱	%	
1922下半年	124	1.2	10,263	97.4	153	1.5	10,540
1929			21,601	100.0			21,601
1930			22,917	100.0			22,917
1931			25,253	100.0			25,253
1932	1,187	5.1	21,258	91.6	760	3.3	23,205
1933	572	2.5	21,117	93.9	811	3.6	22,500
1934	2,901	12.3	20,630	87.7			23,531

資料) 1922下半年は、長沙『大公報』民国13年1月20, 23—25, 28日, その他は、孟学思『湖南之棉花及棉紗』下編8頁。

湖南第一紗廠が参入して以降の湖南綿糸市場は、上海綿糸、武漢綿糸そして地元綿糸が三つ巴の争いを展開した。一九三〇年代にはいると、湖南第一紗廠の製品が立地条件を生かしてかなり手紡糸を駆逐したこともあって、湖南の機械製綿糸に対する需要量は、一九三三年には三〇万担を超す規模に達した。この年、湖南に供給された機械製綿糸は、長沙經由の外来綿糸が六二、七五二梱、岳陽經由の外来綿糸が二〇、五九三梱、地元綿糸が二三、五三一梱、合計一〇六、八七六梱で、地元綿糸の占めるシェアは二二%であった。^①

また表—一七によると、湖南各地の産銷税局の徴税統計では、一九三四年における地元綿糸のシェアは三二%に急上昇している。この年は折からの農村恐慌で湖南第一紗廠の売上が悪化したため、一月に省政府が「湖南棉紗管理所」なる機関を設置し、外来綿糸の流入を制限して地元綿糸の保護をはかった。^② この処置が地元綿糸のシェアを急上昇させたのであろう。逆に、外来綿糸がこの網から逃れるために、地下に潜ったという可能性も考えられる。いずれにしても、一九三四年はやや例外的な年で、通常では地元綿糸のシェアは四分の一度度であったと見るのが妥当なところであろう。表—一七で注目すべきいま一つの点は、長沙での取引高が、湖南省全体の約三分の二を占めていたことである。

三四年の数字でありながら、表—一七が徴税段階での調査であるのに対し、表—一八の方は外省民族紡の長沙販売処での売上高および湖南第一紗廠の生産高のデータをまとめたものであるため、相当の出入りが認められる。つまり表—一八では、地元の湖南第一紗廠綿糸は、長沙以外の地方に出荷される分も六千梱ほど含まれているのに対し、武漢、上海などの外来綿糸は長沙周辺に販売されたもののみをカウントしているのである。

表一 17 1934年湖南主要都市での綿糸売上高

都市	綿糸	地元綿糸		外来綿糸		合計
		梱	%	梱	%	
長沙	沙	17,426	31.7	37,503	68.3	54,929
常德	德	9,404	46.3	10,906	53.7	20,310
衡陽	陽	830	8.7	8,734	91.3	9,564
其他	他			2,235	100.0	2,235
合計	計	27,660	31.8	59,378	68.2	87,038

資料) 孟学思編『湖南之棉花及棉紗』下編24頁。

表一 18 長沙における番手別綿糸販売高 (1934年)

工場	番手	14番手以下		16番手		20番手		20番手超過		総計
		梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	
湖南第一		2,901	12	20,630	88					23,531
湖北第一		1,340	27	800	16	2,215	44	630	13	4,985
永安		736	5	1,476	11	6,565	47	5,177	37	13,954
申新		280	4	200	3	4,500	57	2,880	37	7,860
合計		5,257	10	23,106	46	13,280	26	8,687	17	50,330

資料) 孟学思編『湖南之棉花及棉紗』下編8, 47, 48頁。

このような点を考慮しながら、表一八をみると、長沙における綿糸販売シェアでは、湖南第一が四六・八%でトップにたち、上海の永安と申新が計四三・三%、武昌の湖北第一紗廠が九・九%を占めた(既述のように湖南全体では、湖南第一のシェアは通常二五%前後であった)。番手別販売高では、一六番手が、二万三千担余りで、全体の半分近くを占め、次いで二〇番手が一万三千担余りで、四分の一以上を占めた。さらに二〇番手超過、一四番手以下とつづいた。長沙はなお、二〇番手以下の農村向け太糸が八〇%以上を占める在来型傾向のつよい市場であった。

興味を引くのは、それぞれの番手毎の供給元である。この年の湖南第一紗廠は、一六番手のほかに、一〇番手も二千九百梱ほど供給した。もちろん主力は一六番手で、そのシェアは九〇%近くに達した。湖北第一紗廠は、すべての分野を網羅してはいるが、主力は二〇番手にあった。上海の永安と申新も、すべての分野を網羅してはいるが、主力はあきらかに二〇番手および二〇番手超過にあった。長沙の綿糸市場は、上海、武漢、長沙の各民族紡が、番手別にピラミッド状の階層を形成していたのである。しかもこの階層化は、完全な輪切り状態になっていたわけではなく、上海の民族紡であっても一六番手以下の分野にも、なお製品の供給をつづけ、一定の影響力を保持していたのである。

このような傾向は、全国的な規模で番手別生産比率をまとめた表一九にもよくあらわれている。一九三〇年代における民族紡の高番手化には、年毎に一進一退はあるものの、例えば一九三三年における二〇番手超過の割合をみると、上海の一八・二%を先頭に、江蘇内地、河北北天

表一 19 1930年代民族紡の綿糸番手別生産比率(%)

番手 地方	1931年			1932年			1933年		
	20手未満	20番手	20手超過	20手未満	20番手	20手超過	20手未満	20番手	20手超過
上海	63.5	25.5	11.0	54.1	34.2	11.7	39.6	42.2	18.2
江蘇内地	76.0	22.0	2.0	60.4	33.0	7.6	52.1	33.3	14.6
湖北	49.0	27.3	23.7	73.5	16.9	9.6	69.8	21.2	9.0
河北	78.6	5.1	16.3	86.0	7.1	6.9	82.0	7.0	11.6
其他各省	80.0	17.0	3.0	85.5	9.1	5.4	90.0	6.4	3.6
全国平均	70.0	20.0	10.0	67.9	23.4	8.7	58.7	28.0	13.3

資料)『紡織時報』第1140号(民国23年11月29日)。

津、湖北、武漢とつづき、内陸民族紡の其他各省は、わずか三・六%で最下位におかれていた。逆に二〇番手未満では、其他各省は九〇%にも達している。生産の面からも、上海を頂点とするピラミッド状の階層化が確認できる。

低番手綿糸は、総コストに占める原綿コストの比率が高いので、沿海都市の先進的な工場に比べ、生産コストが相対的に高く、原綿コストが相対的に低い内陸工場にとって、比較的利益利な分野であった。逆にいえば、後進の内陸民族紡は低番手綿糸の分野においてのみ、先進の沿海都市民族紡に対抗できる条件を備えていたことになる。

湖南市場でも、一九二八年に湖南第一紗廠の綿糸が本格的に参入して以降、そのような傾向が顕著に表れた。表一〇Aに示したように、湖南第一紗廠の本格的な市場参入の以前から、長沙に「分荘」を開設していた永安は、一九二六年の段階では一六番手、六割、二〇番手、三割という在来型傾向のつよい構成で販売していたのを、湖南第一紗廠の参入以降は次第に二〇番手さらに二〇番手超過へと主力を移していき、最終的に一九三四年の段階では、一六番手は一割にまで低下し(もつとも絶対量はさほど減少したわけではない)、二〇番手と二〇番手超過で八割以上を占めるにいたった。

一方表一〇Bによると、一九二九年になってようやく長沙に「批発処」を開設した申新の方は、すでに湖南第一紗廠の一六番手綿糸が優勢を占めていた長沙市場の状況をふまえ、その分野での競争を避けて、最初から二〇番手および二〇番手超過の分野に主力を置いていた。長沙市場では一六番手以下の太糸については、上海綿糸が湖南第一紗廠の綿糸に太刀打ちできなくなったことをよく示している。

表—20A 上海永安紡績公司長沙分荘の綿糸番手別販売高

年	10番手以下		16番手		20番手		20番手超過		合計 梱
	梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	
1926	154	4.3	2,223	61.8	1,080	30.0	141	3.9	3,598
1927	251	9.1	1,369	49.4	823	29.7	326	11.8	2,769
1928	1,535	21.2	2,988	41.3	1,588	21.9	1,130	15.6	7,241
1929	2,352	18.8	4,806	38.4	3,566	28.5	1,806	14.4	12,530
1930	1,049	11.1	2,260	23.9	4,113	43.6	2,016	21.4	9,438
1931	3,951	25.5	4,287	27.7	4,490	29.0	2,770	17.9	15,498
1932	2,529	24.4	1,856	17.9	4,401	42.5	1,558	15.1	10,344
1933	2,725	16.2	4,262	25.3	7,338	43.5	2,539	15.1	16,864
1934	736	5.3	1,476	10.6	6,565	47.0	5,177	37.1	13,954

表—20B 上海中新紗廠長沙批發処の綿糸番手別販売高

年	10番手以下		16番手		20番手		20番手超過		合計 梱
	梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	
1929	700	12.4	900	16.0	2,800	49.7	1,230	21.8	5,630
1930	950	12.6	800	10.7	3,400	45.3	2,360	31.4	7,510
1931	860	11.1	780	10.0	3,600	46.3	2,540	32.6	7,780
1932	960	10.7	700	7.8	4,500	50.1	2,820	31.4	8,980
1933	630	7.6	350	4.2	4,600	55.7	2,680	32.4	8,260
1934	280	3.6	200	2.5	4,500	57.3	2,880	36.6	7,860

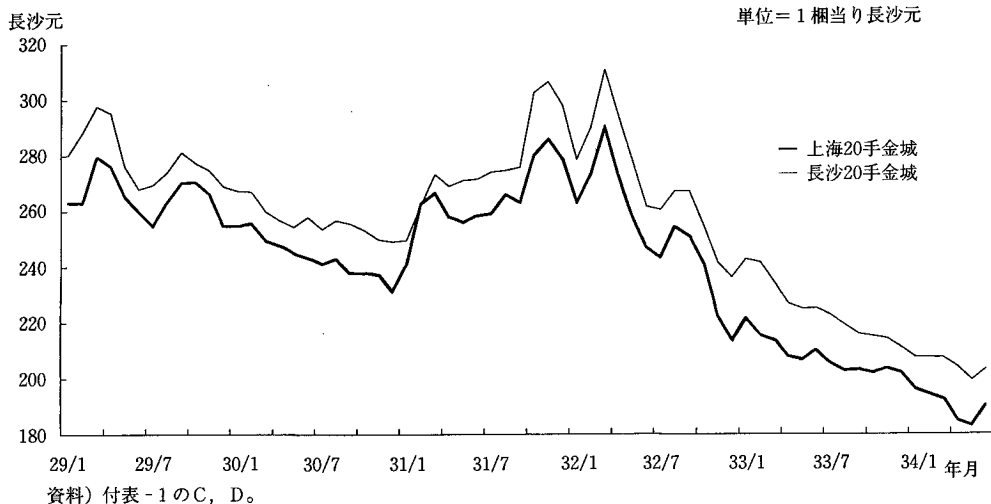
資料) 孟学思編『湖南之棉花及棉紗』下編47頁。

備考) 梱数の小数点以下は四捨五入した。

一六番手以下の太糸では生産コストの占める割合が低いため、上海綿糸も、生産コストの開きだけでは原料コスト、販売コストでの劣勢をカバーしきれず、地元綿糸に敗退せざるをえなかった。一方、二〇番手以上の分野では、そもそも湖南第一紗廠に原綿、技術などの点で生産できる条件がなかった。たとえ生産できたとしても、生産コストの割合が高いため、原料、販売での有利な立地条件を差し引いても、なおその劣勢を挽回できなかったのである。こうして長沙の綿糸市場では、上海、武漢、長沙の綿糸が、一部分重なりあいながら、それぞれ得意の分野に主力をおいたわけである。

ところで、長沙における綿糸相場は、このような重層的な市場構造とどのような関係にあったのであろうか。図一八は、上海永安公司の「金城」二〇番手綿糸について、上海と長沙での相場を比較したものである。長沙での相場は、長沙元で表示された『長沙商情日刊』のデータから、月毎の平均値を割出したものである。一方、上海での相場は、『中国棉紡統計史料』に所載のものであるが、一九三二年末までは規元両、三三年からは国幣元で表示されていて、長沙での相場とストレートには比較できないので、月平均の規元両と長沙元のレートあるいは国幣元と長沙元のレート（長沙錢業公会の『行情簿』に基づくデータ）を掛けて、長沙元に換算した。

図-8 20番手金城の上海と長沙の相場比較



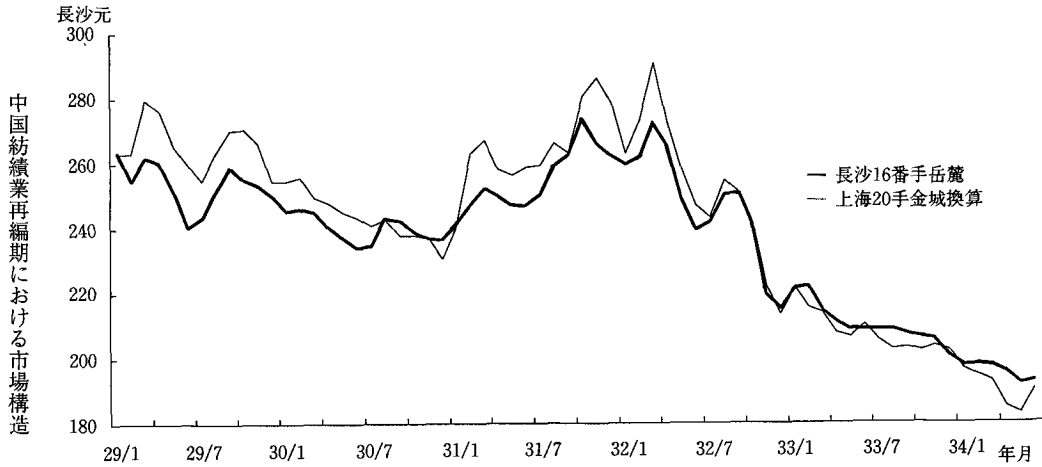
その結果判明したのは、図一八に明確に表れているように、両地での二〇番手金城の相場がきわめて強い相関関係を保ち、ほとんどタイムラグをおくことなく連動していたことである。長沙での相場が、上海での相場よりもつねに上位にあるが、その差は長沙元で一五元前後ではぼ一定である。この開きは、両地間の流通経費に相当するものと考えてよいだろう。またこの五年半の期間について、両地での金城相場の相関係数(一に近いほど相関関係が強い)をみると、その値はじつに〇・九八五に達する。このことも、両地での相場が極めてつよい相関関係で結ばれていたことを裏付けている。

この分析結果は、いくつかの地域市場に分断されていた当時の中国にあっても機械製綿糸に関する限りは、地域市場を超えた全国的な規模で、すでに同一商品同一価格が貫徹されていたことを示唆している。機械製綿糸は、規格化された代表的な工業製品として、上海を中心とする同心円的な価格体系で統一された全国市場を形成しつつあったと考えられる。この同心円的な価格体系で統一された全国市場の中で、湖南市場もまた上海での相場動向に強く制約される立場におかれていたのである。

しかも、このような価格体系は永安の金城二〇番手という同一ブランド同一番手の上海綿糸にのみ有効だったのではなく、間接的にはあるが地元綿糸の相場形成にも、つよい支配力をもった。図一九は、湖南第一紗廠の「岳麓」一六番手綿糸の長沙における相場を、「金城」二〇番手綿糸の上海相場を長沙元に換算し

図-9 長沙での岳麓と金城換算の相場比較

単位=1 梱当り長沙元



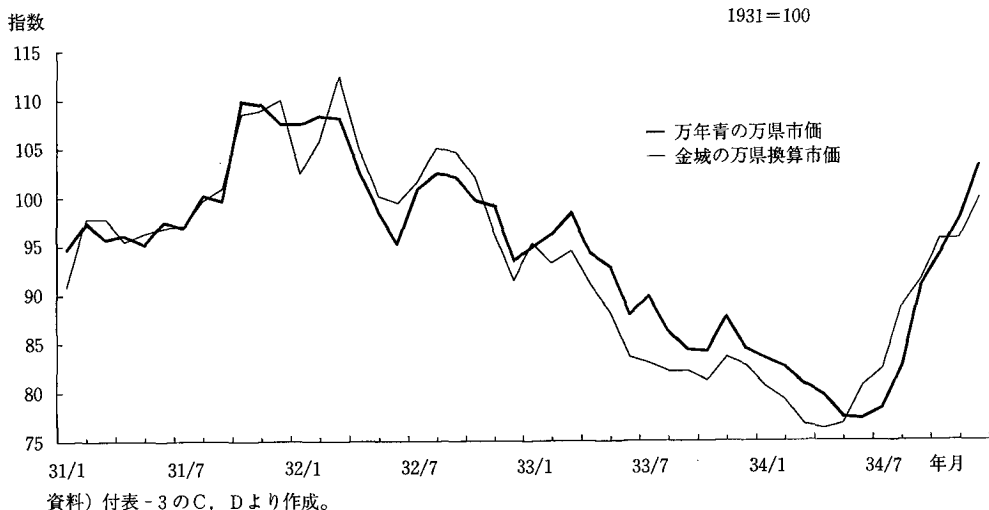
資料) 付表-1のC, E。

た数値と比較したものである。先の図一八と比較すると、出入りが若干多くなっていることは否めないが、基本的な騰落傾向において、著しく齟齬する局面は認められない。しかもこの場合も相関係数は、予想よりもかなり高く、〇・九八三にもなった。地元綿糸の相場もまた、上海の綿糸相場に上海・長沙間の為替レートを掛け合わせる採算式に沿うようなかたちで、形成されていたことがわかる。長沙の綿糸相場は、上海綿糸であると地元綿糸であるとを問わず、上海の綿糸相場に従属していたとみなすことができる。

上海の綿糸相場が支配力をもったのは、長沙市場だけではなかった。いまま少しバイアスのかかった例として、図一〇では、武昌裕華紗廠の「万年青」一四番手綿糸の四川省万県における実際の相場と、「金城」二〇番手綿糸の上海相場に上海と万県との為替レートを掛けて算出した換算値について、一九三一年の年平均を一〇〇とする指数を比較した。「金城」二〇番手綿糸の方は、当時おそらく万県では販売されてはいなかったであろうから、いわば理論値の意味合いをもつ数値である。利用できるデータは、一九三〇年一月から三四年一二月まで、五年分あるが、一九三〇年の一年分は、たぶん算定方法の違いから生じたと思われる大きな断層が為替レートにみとめられ、その修正の方法もいまのところ推定できないので割愛した。

その結果判明したのは、やはり両者のきわめて強い相関関係である。一九三二年一月以降数カ月間だけは、上海事変の影響で「金城」の相場が激しい騰落の動

図 - 10 武漢万年青と上海金城の万県市価指数



きをみせたため、両者の間に乖離が生じたが、それ以外は万県の「万年青」相場が、ほぼ一カ月遅れで上海の「金城」相場に追隨していた様子を、はっきりと見て取ることができる。その相関係数は、〇・九四四で、図一九の「岳麓」と「金城」にはおよばないものの、やはり相当つよい相関関係を示している。バイアスが一つ増えた分、相関係数もやや低下したのであろう。武昌綿糸の万県相場もまた、上海綿糸相場に制約されるかたちで形成されていたのである。

以上のような相場比較には、綿糸相場と為替相場の両方について同質のデータが必要であるため、現在のところ二例しか提示できない。サンプル不足を承知の上で、あえて見通しを述べておくならば、「一九二三年恐慌」以降上海を中心として同心円状に形成された機械製綿糸の全国市場は、一方で上海「在華紡」を頂点とするピラミッド状の重層的な市場構造を次第に明確にしながら、他方では上海相場を基準とする統一的な価格体系を確立しつつあったように見受けられる。このように重層的かつ均質的な全国市場の中で、湖南第一紗廠の綿糸は、価格の面では上海綿糸相場の支配をつよく受けながら、農村在来織布向けの太糸という分野を分担していた。再編期の中国市場は、製品綿糸においては全国的な価格の統一性と市場の重層化をその特色としていたのである。

2 湖南綿花相場の動向

内陸民族紡のいま一つの有利な立地条件は、近隣で生産される綿花を最少の流

通経費で手当できる点にあった。湖南第一紗廠も、太糸生産に特化していたこともあって、湖南で生産される在来種綿花を、おもな原料としていた。一九三二年の混綿例によれば、一〇番手は湖南荒毛五〇%、湖南細毛三〇%、屑綿二〇%、一六番手は湖南荒毛六五%、湖南細毛二五%、屑綿一〇%で、主力の製品はすべて湖南綿花だけで紡出できる条件にあった。^③

しかし、湖南は綿花生産のさほど多い省ではなかった。全省の大部分をおおう紅土は綿花栽培には適しておらず、わずかに洞庭湖周辺に偏在する中部土壤地帯だけが綿花を産した。おもな産地は、澧県、華容、常德、安郷の各県で、綿作の増加した一九三〇年前後でも、生産高は平年作で二〇万担程度にすぎず、省内での自給すら、おぼつかない状況であった。そのため、生産が軌道にのった後の湖南第一紗廠の原綿手当は、「若し湖南省内の棉産が豊作の場合には所要棉花の全部を省内で収買し、不足の場合には漢口で追加購入する」ようになった。^④

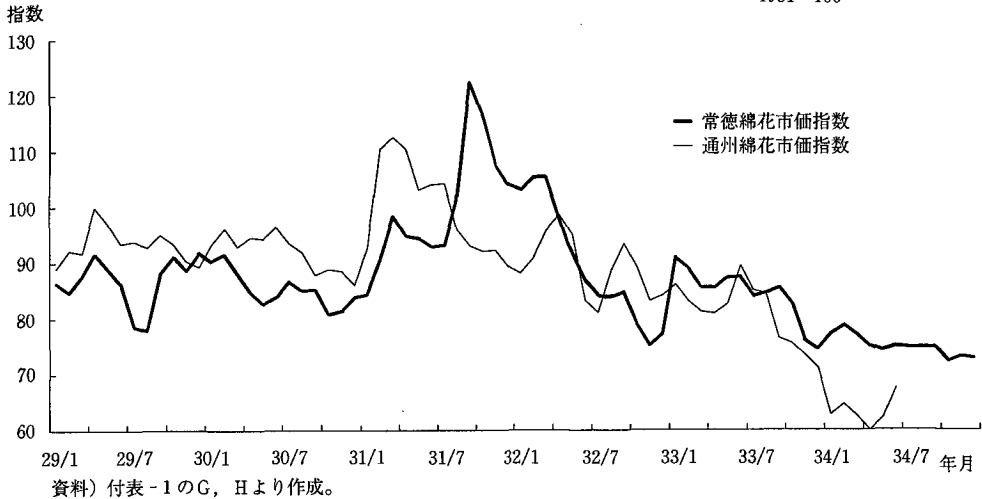
もつとも、湖南綿花も省外への移出が皆無だったわけではない。とくに一九二三年以降、民族紡の族生した武漢から、湖北棉花暴騰時の鎮め役として湖南綿花に買い注文の入る場合がでてきたため、省外への移出が相当量に上る年もまま見られた。海関經由の移出高は最高を記録した一九三〇年には、四万八千七百担を数え、そのほとんどが武漢に送られたという。^⑤

湖南綿花は、質が悪いうえに、一六番手以下の太糸しか紡げなかったため、上海にまで送られることはほとんどなく、まだ一六番手綿糸に生産の主力をおいていた武漢の民族紡だけが、湖北棉花の暴騰時に原綿コストの削減のために利用する程度だったのである。したがって湖南綿花は、太糸用湖北棉花との競合関係はある程度強いられたものの、上海を中心とする全国的な優良棉花の流通網とは、没交渉の立場にあった。

図一一一は、湖南の標準的な棉花である常德棉花の長沙における価格指数と、通州棉花の上海における価格を長沙元に換算した指数とを比較したものである。もつとも大きな乖離は一九三一年九月にみられる。大洪水による湖南棉花の壊滅で、常德棉花が担当たり五九元にまで暴騰したためである。このような突発的な要因による乖離は、綿糸の場合にも上海事変の時のように例がないわけではないので、しばらくは問題にしないとしても、それ以外の部分でも両者が騰落相反する動きをみせている個所が、

図 - 11 常德綿花と通州綿花の長沙市価指数比較

1931=100



随所にみうけられる。ごく大ざっぱに観察すると、一九三一年半ばまでは、通州綿花の方が割高で、それ以降は常德綿花の方が割高に逆転する。

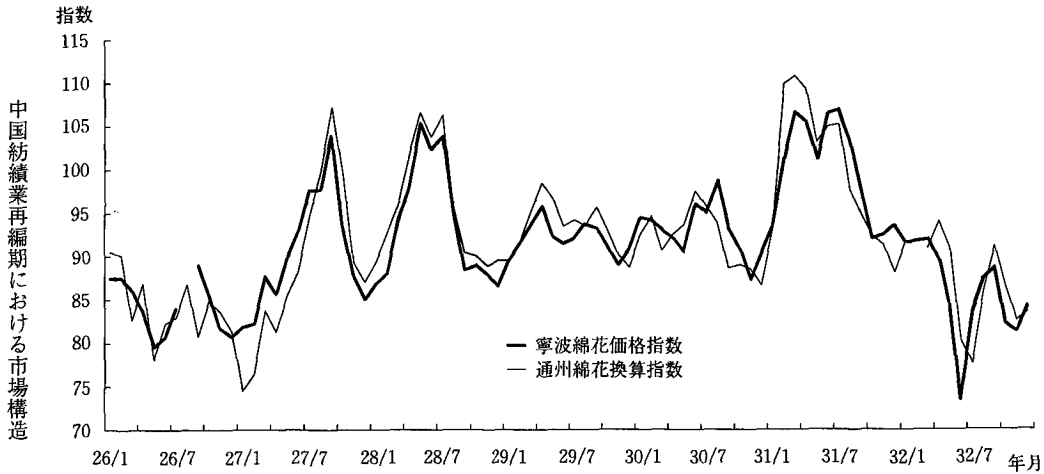
このような価格関係を先の綿糸における関係と比べてみれば、上海と長沙における綿花価格の不統一性は容易に看取できるであろう。常德綿花の長沙価格指数と通州綿花の長沙元換算指数とについて、その相関係数を算出すると、〇・五三六といきわめて低い結果がでる。前節の「岳麓」一六番手綿糸と「金城」二〇番手綿糸の相関係数、〇・九八三と比較すれば、湖南綿花相場の相対的な独立性はおのずから明らかになる。

このように湖南綿花が上海相場から相対的に独立した立場を保持しえたのは、もっぱら上海紡績業が湖南綿花に食指を動かさなかったことに起因しているように思われる。その根拠の一つとして、図一―二では、上海紡績業の原綿手当のネットワークに組み入れられていた寧波綿花について、その現地での価格指数を、通州綿花の上海価格を寧波元に換算した指数と比較してみた。もちろん、現地での特殊事情に起因すると推測されるような出入りが何カ所かはみうけられるが、常州綿花と通州綿花の関係に比べれば、寧波綿花の相場は、基本的に上海相場に従属していたと断定してまちがいない。この例の相関係数は、〇・九〇八で、綿糸の係数には一步譲るものの、やはり相当つよい相関関係が認められる。

長沙と寧波、二つの綿花相場の実例を既述の再編期における綿花流通の市場構造と総合して判断すると、「一九二三年恐慌」以降、上海「在華紡」を頂点とし

図-12 寧波綿花と通州綿花の価格指数比較

1931=100



資料) 附表-2のC, Dより作成。

て進められた中国棉花市場再編の動きは、上海紡績業が紡績用優良棉花を全国的な規模で選別的に買いあさった結果、上海市場に直結する地方の市場と、そのネットワークから外れた地方の市場との並存状況をうみだした。上海に直結する市場では、その棉花相場は上海相場に從属する立場におかれたのに対し、その圏外におかれた市場では、上海相場からは比較的独立した相場展開がみられた。このような「住み分け構造」ともいべき市場構造の中で、湖南棉花市場は、上海紡績業の需要する優良棉花を供給できないが故に、上海を中心とする全国的な市場網の圏外にあつて、武漢にのみ向かつて開かれた袋小路の状態におかれていたのである。

このような湖南棉花市場の立場に転機をもたらしたのは、既述のように一九三一年六月の大洪水による棉花生産の壊滅的打撃であつた。この年、湖南の棉花生産高はわずか四万五千担で、前年の五分の一以下にまで激減した。そのため、常德棉花の担当たり価格は、一月の四〇元余りから、九月には五九元と五割近くの暴騰にみまわれた。

湖南棉花を主要な原料としてきた湖南第一紗廠は、地元棉花の記録的な減収と暴騰という最悪の事態を前にして、原綿手当の方法を変更する必要に迫られた。ある統計では、湖南第一紗廠の消費する棉花のうち、省外からの棉花は一九三〇年下半年から三一年上半年はわずか一万六千市担にすぎなかったのに対し、三一年下半年から三二年上半年は、いっきよに八万三千市担弱と五倍以上

34/01	7,282	252,249	6,976	276,250			14,258	528,498
34/02	1,445	55,995	674	26,690			2,119	82,686
34/03	502	17,265	20,470	825,948			20,972	843,213
34/04	808	28,984					808	28,984
34/05	2,336	82,694					2,336	82,694
34/06	428	15,151					428	15,151
34/07	243	8,602					243	8,602
34/08	3,043	113,504	2,892	106,677			5,935	220,181
34/09	53	1,982					53	1,982
34/10	14,758	531,009	3,315	103,097			18,073	634,105
34/11	18,517	647,076	3,919	135,206			22,436	782,281
34/12	7,882	286,993	4,192	145,882			12,074	432,875
合計	57,297	2,041,505	42,438	1,619,748			99,735	3,661,253
35/01	8,136	243,317	5,091	177,167			13,227	420,483
35/02			3,023	103,991			3,023	103,991
35/03	750	24,775	10,245	357,551			10,995	382,326
合計	8,886	268,092	18,359	638,709			27,245	906,800

資料) 平漢鐵路管理局編『長沙經濟調査』支那經濟資料一(生活社 昭和15年9月)68—81頁。

に増加したといふ。

表一—二—では、さらに詳しく湖南第一紗廠の月毎の原綿手当状況を示している。先にも触れたように、大洪水以前には、湖南第一紗廠は毎月ほぼ定期的に湖南綿花を購入し、追加として漢口綿花を彈力的に手当していた。ところが、大洪水を境にして、湖南綿花はいうまでもなく、漢口綿花もまったく購入できなくなつてしまつた。

そのため、湖南第一紗廠は、折からアメリカ綿花相場の下落と為替相場の銀高が重なつて銀建て価格の暴落したアメリカ綿花を、上海から大量に購入することで急場をしのいだ。この処置は一年余りつづいたが、翌三二年の秋になつて、湖南綿花が市場に流通しはじめると、放棄されてしまつた。アメリカ綿花の手当は、あくまで応急の処置だったのである。

しかし湖南の綿産高は、三二年に二〇万担近くまで戻したものの、農村恐慌の進行とともに再び不振におちいり、三三年一八万担弱、三四年一〇万担と低下しつづけた。このため、湖南第一紗廠の原綿手当は、割安感の強い漢口綿花に重点が移り、三三年は七万担近く、三四年は四万二千担余りを購入した。大洪水と農村恐慌の相乗的な影響で、湖南第一紗廠の原綿手当は一変を余儀なくされたのである。大洪水までは「黄金時期」の再来を思わせるような好況に沸いた

表-21 湖南第一紗廠の原綿手当状況

種類 年月	湖 南 綿 花		漢 口 綿 花		アメリカ綿花		合 計	
	購入量 (担)	購入額 (元)	購入量 (担)	購入額 (元)	購入量 (担)	購入額 (元)	購入量 (担)	購入額 (元)
31/01	7,631	282,827					7,631	282,827
31/02	4,894	194,802	5,440	266,349			10,334	461,151
31/03	8,335	413,395	988	51,969			9,323	465,363
31/04	4,926	236,152	888	46,709			5,814	282,861
31/05	2,788	127,485	1,443	75,902			4,231	203,386
31/06	4,957	213,435	11,556	651,811			16,513	865,246
31/07	956	41,945					956	41,945
31/08								
31/09	219	10,662	4,381	224,272			4,600	234,934
31/10	1,676	80,280					1,676	80,280
31/11	4,760	205,632			12,906	672,402	17,666	878,035
31/12	1,092	46,082	179	9,666	8,585	434,401	9,856	490,149
合計	42,234	1,852,697	24,875	1,326,677	21,491	1,106,804	88,600	4,286,177
32/01	3,283	126,396					3,283	126,396
32/02					9,785	459,895	9,785	459,895
32/03	4,994	206,252					4,994	206,252
32/04	3,734	166,910			8,530	409,440	12,264	576,350
32/05	188	8,404	21	893	176	8,624	385	17,920
32/06	4,019	193,314			19,799	976,091	23,818	1,169,405
32/07	1,329	50,832	1,221	50,244			2,550	101,076
32/08	1,844	64,993	746	32,451			2,590	97,444
32/09	2,079	71,582	4,336	184,867	3,644	215,360	10,059	471,809
32/10	15,198	556,112	1,012	42,403			16,210	598,515
32/11	4,718	178,858					4,718	178,858
32/12	10,618	404,172					10,618	404,172
合計	52,004	2,027,823	7,336	310,857	41,934	2,069,410	101,274	4,408,090
33/01	6,150	236,921					6,150	236,921
33/02	3,219	140,450	5,549	257,221			8,768	397,672
33/03	1,930	79,112	1,374	62,517			3,304	141,629
33/04	5,648	207,843	3,177	140,723			8,825	348,566
33/05	2,187	81,566	5,836	257,568			8,023	339,134
33/06	1,545	58,919	1,859	81,610			3,404	140,529
33/07								
33/08								
33/09	3,654	106,707	1,229	49,015			4,883	155,722
33/10	6,087	213,536	9,320	363,773			15,407	577,309
33/11	9,002	309,588	3,029	117,843			12,031	427,431
33/12	6,891	256,185	38,415	1,521,299			45,306	1,777,484
合計	46,313	1,690,827	69,788	2,851,568			116,101	4,542,395

中国紡績業再編期における市場構造

湖南第一紗廠が、一九三一年九月以降一転して不況に呻吟するようになった原因は、農村恐慌というマクロの状況に加え、この原綿手当の一変が大きく作用していると考えられる。湖南第一紗廠のような内陸地方の後進民族紡が沿海地方の先進民族紡に對抗しえた最大の武器は、いささか粗悪であるにしても、上海相場から相対的に独立した地元綿花を最少の流通経費で手当てできる点にあった。

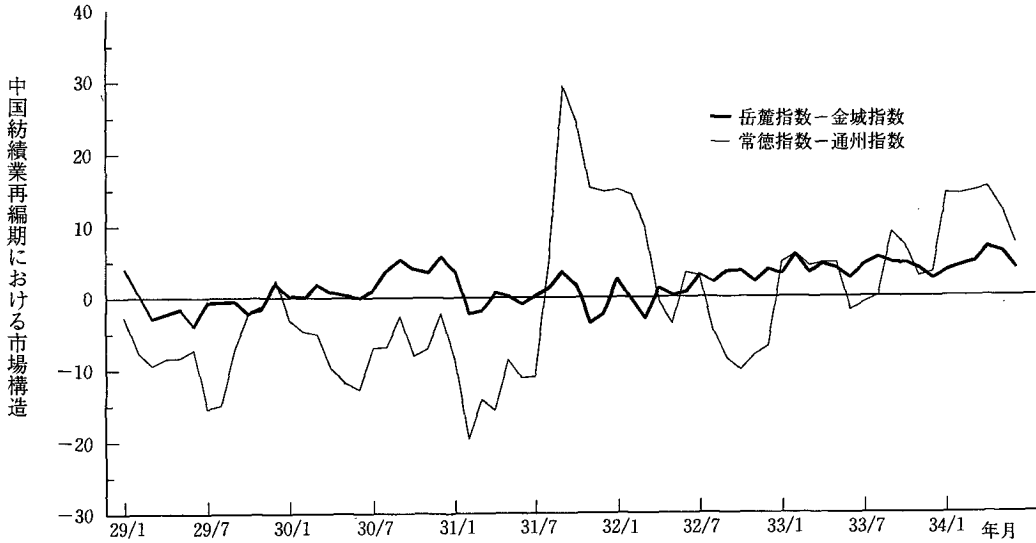
それがいまや、上海を経由して購入しなければならないアメリカ綿花、あるいは武漢もしくは上海の民族紡と競合する湖北綿花を手当てざるを得なくなったのである。しかも、内陸地方の後進民族紡が、ほとんど唯一の市場としていた農村の経済は、一九二〇年代後半の「逆シエール」のもとにおける比較的好調な状況から、一九三二年をさかいに恐慌状態に一転したのであるから、原綿手当の面でも製品販売の面でも、その苦境は明かであった。

図一―三は、湖南第一紗廠の業績の分かれ目となった一九三一年の年平均を一〇〇として、長沙と上海の間における綿糸および綿花の価格指数差を対比したものである。太線の方は、図一―九のデータから、「岳麓」一六番手綿糸の長沙における価格の指数と「金城」二〇番手綿糸の上海相場を長沙元に換算した指数を算出し、「岳麓」の指数から「金城」の指数を引いたもので、細線の方は、図一―一のデータを利用して、常德綿花の長沙における価格指数から通州綿花の上海相場を長沙元に換算した指数を引いたものである。太線がプラスにある時は、「岳麓」が「金城」に比べて割高、細線がプラスにある時は、常德綿花が通州綿花に比べて割高ということになる。

綿糸については、すでにみたように、「岳麓」と「金城」はきわめて強い相関関係を保っていただけあって、指数の差もほとんどない。敢えていえば、一九三二年半ば以降、「岳麓」の若干割高という傾向が定着している。一方綿花の方は、相関係数が〇・五三六と低いだけに、指数の差はきわめて複雑な動きを示している。しかし、誰の目にも明らかのように、一九三一年九月まではほぼ一貫して常德綿花が相当に割安であったのが、それ以後は三二年下半年の一時期を除いて、常州綿花の割高傾向が顕著になった。

図-13 長沙、上海の綿糸、綿花価格指数比較

1931年=100の指数差



資料) 付表-1のC, E, G, Hより作成。

湖南第一紗廠の業績が一九三一年九月を境に一変した原因は、製品綿糸の価格が上海綿糸相場にほぼ従属するかたちで推移したのに対し、原料棉花の価格が上海棉花相場から相対的に独立した動きみせ、割安から割高に一転した点に求めることができる。

しかも重要なことは、湖南第一紗廠の「黄金時期」をもたらしたこのような市場環境は、けつして偶然的の産物ではなかったという事実である。「一九二三年恐慌」以降の中国紡績業の市場再編は、製品市場においては重層的かつ均質的な全国市場の形成を通じて、製品価格の統一性を実現する一方、原綿市場においては、上海に直結する市場圏とそれ以外の市場圏の並存という住み分け構造が、統一性と不統一性の混在する原綿価格の体系を生み出していった。湖南第一紗廠の「黄金時期」は、あきらかに製品価格における統一性と原綿価格における不統一性を結果した「一九二三年恐慌」以降の全中国的な市場構造が、その形成をもたらしたと考えることができる。⁽⁷⁾

むすび

かつて第一次世界大戦後期から戦後にかけての時期に、本稿で検討したような市場状況に類似した状況が、東アジア的な規模で出現したこと

があった。当時の中国綿糸市場では、日本綿糸の価格動向が上海などの沿海都市に勃興しつつあった民族紡の綿糸価格をも支配していた。一方、日本紡績業の原料綿花は、インド綿花が主体で、中国綿花はインド綿花暴騰時の鎮め役に位置づけられていた。このような当時の東アジアの市場構造が、折からの世界的な綿製品暴騰による紡績ブームの中で、日中間における製品価格の統一性と原料価格の不統一性をもたらし、それがひいては中国市場の「紗貴花賤」という理想的な市場環境を生み出した。その当然の結果が、中国紡績業の「黄金時期」にほかならない。⁽¹⁾

しかし「黄金時期」の好況は、民族紡の飛躍的な生産力の増大、それによる太糸市場からの外国綿糸駆逐、さらに日本紡績資本の雪崩をうった対中国進出等々の事態をよびおこし、「一九二三年恐慌」とそれにつづく中国綿糸、綿花市場の再編をうながした。これら一連の事態の推移は、ほぼ十年の時間を隔てて、かつて日本と中国の間にもみられた製品価格の統一性と原料価格の不統一性という市場関係を、いまや上海などの沿海都市と内陸地方との間に転移させることになった。第一次世界大戦以降、日本紡績資本が「黄金時期」の市場環境に対応して、まず太糸の生産拠点を日本国内から中国の沿海都市に移し、さらに「一九二三年恐慌」の市場環境に対処して、中国の生産拠点での主力を細糸にシフトしたこと、しかもそのような生産シフトに合わせて原綿手当の戦略をつぎつぎに転換していったこと、製品と原料の両面にわたるこれらの動向が、綿工業における日中角逐の最前線を、日中間の海洋からはるか西方の内陸へと移動させたのである。⁽²⁾

いうまでもなく、湖南第一紗廠の「黄金時期」についての本稿の分析が、ほかの内陸民族紡にも有効な普遍性をもつか否かは、さらに多くの内陸民族紡に関する実証的な研究成果の蓄積に待つしかないが、その際、以上検討してきたような「一九二三年恐慌」以降の全国的な市場構造は、分析の視座として十分な注意が払われるべきであると考えられる。

注

第一章

(1) 生産が本格化した民国一七年（一九二八）までの前史について、以

下にそのアウトラインを記述しておく。

湖南第一紗廠の歴史は、民国元年（一九一二）にまでさかのぼる。

辛亥革命の余韻さめやらぬ長沙で、呉作霖なる人物が、湖南省政府の

公金六〇万円を借り受けて、湘江対岸の銀盆嶺に、総錘数五万錘にも及ぶ一大紡績工場の建設に着手したのが、始まりとされる。この工場は最初、「経華紗廠」と命名された。

設立の翌年、民国二年（一九一三）一〇月に、湯懋銘が湖南都督となると、この工場を接収して省有とし、経営形態に早くも変更が生じた（平漢鐵路管理局經濟調査班編『長沙經濟調査』支那經濟資料一「生活社 昭和十五年九月」三八頁）。

民国五年（一九一六）八月、湯にかわって省長兼督軍に就任した譚延闓が、こんどは省有を改めて「帰商承弁」（所有権は省有とし、経営権を民間に出租する）としたのをうけて、朱恩縉らが民国六年（一九一七）八月に承租し、華実紡織会社と改名した。資本金は優先株一〇〇万両、普通株一〇〇万両の合計二〇〇万両で、朱恩縉一人で優先株五〇万両を引き受けた（『長沙大公報』民国六年九月八日。第一紗廠招商承租廣告は『長沙大公報』民国六年一月二日に掲載された。以下、『長沙大公報』については、新聞名を省略して、発行年月日のみを記す）。翌年六月には湖南政府から工場の引き渡しを受けて、操業を開始する予定であった（民国九年二月二〇日）。

ところが、南北混戦の末、民国七年（一九一八）三月省長兼督軍に就任した張敬堯は、軍費調達のためから、鄂商、李子雲に一四八万円でこの工場の売却をはかったのをはじめ、民国八年一月には日本の東亜会社に一五五万円で、民国九年三月には三井洋行に日本円一八〇万円で売却をもちかけていたという（民国一〇年三月一日）。

民国九年（一九二〇）七月、張敬堯を駆逐して復帰した譚延闓、趙恒惕は、ふたたび華実会社に出租する方針で、開業を急いだ（民国九年七月二四日）。

民国一〇年（一九二一）二月、工場の建物及び機械設備一切がようやく完成した。完成までに費やされた公金は、二〇〇万円にのぼった。ところが竣工の後、華実会社に引き渡されるに際して、前年一月に結成されたばかりの湖南勞工会が、湖南省民の公金で建設された工場

が生み出す利益を、ごく一部の資本家が独占することに反対し、華実会社への出租を破棄して湖南省民による共同管理にするよう要求して闘争に入った（民国一〇年二月一七日、三月九日）。

湖南人の省ナショナリズムに訴える闘争は、労働者、学生ばかりでなく、富裕階層をも巻き込んで、盛り上がりを見せた。華実会社は三月三十一日にいったん操業を開始したものの、四月一三日の湖南勞工会の実力行使で停業に追い込まれた。この間、湖北から招聘された經理の趙子安が、漢口から調達してきた十数万円の綿花もろとも、四月二三日に漢口へ引き上げてしまったのをはじめ、湖北、江蘇出身の技師、労働者があいついで帰郷してしまう事態が起こった（民国一〇年四月二五日）。一方、黄愛、龐人銓ら勞工会の指導者たちは、四月二十九日から五月初めにかけて、湖南軍總司令部に自首し、収監された陸軍監獄署でハンストに突入した（民国一〇年四月三〇日）。

三カ月余りの攻防の末、勞工会は華実会社から、一時金として五千元、以後毎年利益の五％を湖南労働者教育経費に提供する、湖南人を優先的に雇用する、などの譲歩案を引き出していったんは闘争を収束させた（民国一〇年六月二七日。もっとも、民国一〇年十一月一日の記事では、勞工会側は教育経費の条件については否定している）。華実会社は七月一日に至って、操業を再開したものの、当初は四、五千錘が稼動しただけで、一月三日になって、ようやく二万錘が稼動した。しかし、操業が本格化すると、一週間ごとに日勤と夜勤がいれかわる過酷な二時間労働が、労働者の不満をうっ積させた。とくに湖南出身の労働者は、湖北出身の労働者との賃金面での大きな格差に不満をつのらせていた（民国一〇年十一月五日）。

勞工会はこの湖南人労働者のうっ積する不満を集約して、待遇改善を訴え、ふたたび闘争を組織したが、今回は社会的な広がりや欠いたまま、翌民国一一年一月一七日には、指導者の黄愛、龐人銓が、趙恒惕によって無政府主義鼓吹の廉で、逮捕、処刑されてしまった。しかしその後も華実会社の経営は、中国紡績業界全体の不況に加え

て、軍閥政府の度重なる借款とストライキの頻発という挾撃をうけ、芳しい成績をあげることはできなかつた。民国十三年（一九二四）後半に、江浙戦争のあおりなどで、半年にもおよぶ操業停止におこまれた例を最たるものとして、たびたび操業停止をくりかえした（民国十三年二月一七日、二二日）。

民国十五年（一九二六）七月、北伐軍が長沙に入り、国民党の湖南省政府が成立すると、華実公司への出租を破棄して省営とする案が、一〇月に省務会議で可決され、名称も湖南第一紗廠と改められた（民国十五年一〇月四日）。二月には左宗澍が工場長に任命され、二〇日に操業を再開した。省政府が公布した「紗廠条例」では、純利益のうち五〇%が省庫に入ることになっていたが、財政逼迫の省會計からは、操業再開のための運転資金として、わずかに二萬元しか支出されず、経営は苦心慘憺の有り様で、操業も途切れがちであった（民国十五年二月一六日）。

民国十七年（一九二八）一月、程潛、白崇禧らの「征西軍」が長沙に入った後、新政権は湖南第一紗廠再開のために、二〇萬元の支出を認め、彭黈雄を工場長に任命した（湖南省政府秘書処第五科「民国二十一年湖南省政治年鑑」〔湖南省政府秘書処 民国二十一年二月〕三四九頁）。

ここに二〇年近くの曲折を経て、湖南第一紗廠の生産は、ようやく軌道にのつた。

(2) 湖南省志編纂委員会編『湖南省志』第一卷 湖南近百年大事紀述（湖南人民出版社 一九八〇年一〇月第三版）六七三―六七四頁。

(3) 武昌の裕華紗廠でも、一九三一年の大洪水でアメリカ綿花を使用することになったが、短い繊維の綿花に合うように設計された機械では、アメリカ綿花は繊維が長すぎて、ローラーに絡まってしまい、作業効率が低下したとの報告がある（『裕大華紡織資本集團史料』〔湖北人民出版社 一九八四年二月〕一四七頁）。なお、『民国二十一年湖南省政治年鑑』三五九頁は、一九三二年の生産コストが異常に高い原因を、

一、利息の増加、二、税金の増加、三、運賃、保険料および倉庫代の支出、四、労働時間の減少の四点に求めている。いずれも、アメリカ綿花の手当による間接的な支出増が、相当の部分を占めているものと推測される。

(4) 『民国二十一年湖南省政治年鑑』三五九頁では、一九三一年の棉花打込率はさらに低く、三五六斤であったとされている。

(5) 低番手の綿糸ほど、農村経済の影響を受けやすい傾向があったことについては、森時彦『一九二三年恐慌』と中国紡績業の再編——『東方学報』第六二册（一九九〇年三月）五三三―五三四頁参照のこと。

(6) 黄愛、龐人銓らがかかげた闘争目標の一つも、外省出身労働者との賃金格差是正であった。本章の注(2)参照のこと。

(7) 久保亨「近代中国綿業の地帯構造と経営類型」——『土地制度史学』第一一三号（昭和六一年一〇月）三五頁。

第二章

(1) 国際市場と中国輸出品価格の関係については、鄭友揆『中国的对外贸易和工業發展』（上海社会科学出版社 一九八四年二月）九一頁、および吳承明『中国資本主義与国内市场』（中国社会科学出版社 一九八五年三月）二七六―二七七頁参照のこと。

(2) 第一次世界大戦期および世界恐慌期のシェアレについては、吳承明『中国資本主義与国内市场』二七八頁に簡明な指摘がある。なお本稿では、便宜的に「シェアレ」、「逆シェアレ」という言葉もちいることにするが、正確にはそれぞれ「一九一〇—一九一四年を二〇〇とする工業製品価格指数が、農産物価格指数よりも相対的に高い状態」、「一九一〇—一九一四年を二〇〇とする工業製品価格指数が、農産物価格指数よりも相対的に低い状態」とでも表現するべきであろう。

(3) 輸入品一九品とは、白糖、くらの食品二品、シャーターイングなどの布九品、一六、一四番手綿糸、毛糸の糸類三品、灯油、蠟燭、釘、

石鹼、紙巻き煙草の雜貨五品で、第一次産品は「くらげ」だけであった。

- (4) 「黄金時期」の中国紡績業における「紗貴花賤」というシエールの要因については、森時彦『五四時期の民族紡績業』——京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』第二函第四分冊（同朋舎一九八三年二月）第二章第二節、第三節の分析があるので、併せ参照されたい。

- (5) 十九世紀から二十世紀三〇年代にかけての銀価格については、吳承禧『百年來銀價變動の回顧』——『社会科学雜誌』第三卷第三期（民國二十一年九月）が系統的である。

- (6) 森時彦『五四時期の民族紡績業』八九頁。

- (7) 森時彦『中国近代における機械製綿糸の普及過程』——『東方学報』第六一冊（一九八九年三月）四九六—四九七頁。

- (8) 許滌新、吳承明主編『中国資本主義發展史』第二卷旧民主主義革命時期的中国資本主義（人民出版社 一九九〇年九月）三三九頁。

第三章

- (1) 楊端六、侯厚培等『六十五年来中国国際貿易統計』国立中央研究院社会科学研究所專刊第四号（民国二〇年）三六、四五頁。

- (2) 一九二〇年以降の中国棉花とインド棉花の価格関係については、森時彦『五四時期の民族紡績業』九一頁参照のこと。

- (3) その象徴的な出来事は、一九二五年一月における印棉運華聯益会の結成である。従来の見解では、この当時インド棉花を使っていたのはほとんどが「在華紡」であったのだから、会員に民族紡が入っていたとしても、実質的には民族紡にとってはなんの利益もたらさなかつたと考えられてきた（高村直助『近代日本綿業と中国』〔東京大学出版会 一九八二年六月〕一八九頁、西川博史『日本帝国主義と綿業』〔ミネルヴァ書房 一九八七年一月〕二二三頁）。しかし実際には、本文中に述べたように「一九三三年恐慌」を契機にはじまった「在華

中国紡績業再編期における市場構造

紡」の高番手化の動きは、一九二五年頃から軌道にのりはじめ、太糸用原綿であるインド棉花の重要性は相対的に低下しつつあった。それに対して、民族紡の方はなお太糸生産に特化していた段階であるから、もしインド棉花を運賃割り引きで手当てできるとすれば、営業上の利益は大きいものがあつたはずである。したがって、印棉運華聯益会は、たしかに五三〇運動で高まつた民族紡ブルジョアジーの反日感情を緩和する目的から、民族紡ブルジョアジーにもインド棉花使用の利益を均霑するという性格をもっていたのであるが、その反面、「在華紡」にとつてはすでに第二義的な意味しかもたなくなつたインド棉花であればこそ、そのような「気前のよさ」を見せることが出来たとも考えられる。印棉運華聯益会に関しては、『紡織時報』第二六六号（民国一四年一月二六日）、第二六七号（二月三日）、第二八七号（民国一五年三月一日）、第三三二号（七月二九日）、第三七三号（二月二七日）等に記事がある。

なお高番手化という戦略をめぐつて、「在華紡」各社が一樣の姿勢でなかつたことは、桑原哲也『企業國際化の史的分析』（森山書店 一九九〇年六月）に詳しい。

- (4) 「花紗市情 棉花（民国十年四月至六月）」——『華商紗廠聯合会季刊』第二卷第四期（民国十年九月）二五六頁。

- (5) 「最近支那紡績業の現状」——『上海日本商業会議所週報』第五〇〇号（一九二一年九月二五日）。まったく同じ記事が、『大日本紡績聯合会月報』第三五〇号（一九二二年一月）にも掲載されている。

- (6) 表一四で、日本からの輸入分も、一九二〇年代には相当の割合を占めるようになり、二七年には八〇万五千担の多くを数えるが、いうまでもなくこれは、インド棉花あるいはアメリカ棉花の再輸出である。

その内訳は二〇年代前半にはインド棉花、二〇年代後半にはアメリカ棉花が多くを占めたものと推測されるが、いまのところそれを示すデータは提示できない。

- (7) 「[民国]二十三年鄭州銀行業綿業概況」——『河南統計月報』第一

卷第二・三期合刊(民国二四年三月) 經濟調査資料 一六九頁。

(8) 『紡織時報』第四三九号(民国一六年九月八日)。

(9) 『山東之物産』第一編(青島守備軍民政部 民国八年一〇月) 一七二頁。

- (10) 以上、吳知「山東省棉花の生産と運銷」——『政治經濟學報』第五卷第一期(民国二五年一〇月)三九一—四一頁。山東、河北兩省でのアメリカ種棉花移植の試みは、いずれも一九一〇年代後半に日本の商社筋が先鞭をつけたといわれている。正定から彰徳までの京漢線沿線では、三菱合資会社が一九一七年から綿作改良事業にのりだしていたが、二〇年になると米綿トライス種の馴化種に主力を注いで、育成種子を地域の農民に配布した。また、張店から高密にいたる膠濟線沿線では、日本人棉花商和順泰が東洋拓殖会社青島支店の援助のもとに二〇万円の融資を得て、一九一八年から事業に着手し、二二年には六〇万斤の米綿種子を輸入して農民に配給した。いずれの事業も、アメリカ棉花の中国への輸入が本格化しはじめた一九二五、二六年に、相次いで排日風潮の高揚と内乱の激化が原因で挫折したが、山東、河北にアメリカ種棉花が普及する発端とはなった(南滿州鉄道株式会社調査部編『北支棉花綜覧』[日本評論社 昭和一五年五月]一五一—一五三頁)。
- (11) 満鉄北支事務局調査部『北支主要都市商品流通事情』第八編青島(昭和一四年四月) 六六頁。
- (12) 沙市の綿貨流通の変遷については、森時彦「華西のマンチェスター——沙市と四川市場」——『東洋史研究』第五〇巻第一号(一九九一年六月)を参照のこと。
- (13) 湖北省志貿易志編輯室編『湖北近代經濟貿易史料選輯』第三輯(武漢 一九八五年)二八一頁。
- (14) 以上、「沙市棉花狀況」——『大日本紡績聯合会月報』第三三七号(一九二四年一月)六一—六二頁。
- (15) 綿糸出荷高の統計では、一九三五年における二〇番手超過綿糸の比率は、「在華紡」で四二・一%、民族紡で八・七%であった(森時彦

「中国近代における機械製綿糸の普及過程」——『東方學報』第六一冊(一九八九年三月)五二九頁)。本文の表一一の比率と比べると、「在華紡」は接近した数字であるが、民族紡は一〇%近くのズレがある。この原因は、細糸用、太糸用の区分の仕方自体にも問題があるのかもしれないが、より主要には時間的なズレによるものと考えられる。三六年三月の靈宝綿一万余梱を除外して計算すると、民族紡の細糸用綿糸比率は一〇・四%に低下する。

(16) 「循環手当法」については、森時彦『五四時期の民族紡績業』六五頁参照のこと。

第四章

- (1) 孟学思編『湖南之棉花及棉紗』湖南省經濟調査所叢刊(湖南省經濟調査所 民国二四年七月)下編二二頁。
- (2) 湖南省政府秘書処統計室『民国二十四年湖南年鑑』湖南省政府統計叢刊之四十三(湖南省政府秘書処 民国二四年一〇月)六一—三六一頁。
- (3) 「湖南第一紡織紗廠調査記」——『紡織時報』第七八七号(民国二〇年四月九日)。
- (4) 『長沙經濟調査』六八頁。
- (5) 孟学思編『湖南之棉花及棉紗』上編三六頁。
- (6) 同前 上編三五頁。
- (7) 既述のように湖南第一紗廠の場合には、一九二七年までは操業の期間が断続的にしかなかった。したがって、二八年以降断続的に操業できるとようになった社会環境の変化も、当然その「黄金時期」形成の要因にあげなければならない。本稿で検討したのは、いわばその大前提のうえにたつて、本格操業まもない湖南第一紗廠が第一年度からめざましい好成绩をおさめることのできた原因を、「一九二三年恐慌」以降の全国的な市場構造の変化という視点からは、どのように解釈すればよいかという問題であった。

むすび

(1) このように、中国民族紡績業の「黄金時期」形成の要因を第一次世界大戦期における東アジアの綿花、綿糸の市場構造にもとめる視点については、森時彦『五四時期の民族紡績業』で論じた。本稿は、その視点を敷衍して中国紡績業再編期の特質解明をめざしたものにほかならない。

(2) 民族紡績業の内陸部への展開については、従来の見解では沿海地方における「在華紡」の圧迫によって内陸部への分散をよぎなくされたのだとする消極的な評価が普通であった。これに対して久保亨「近代中国綿業の地帯構造と経営類型」(二五頁)は、原料立地、販売立地の観点から「それなりに合理的根拠をもつ発展」であったと、積極的な評価をくだす必要性を主張する。その論拠の一つに、一九三六―八三年における内陸紡績業の比重増大をあげ、「内陸部への発展こそ、時代の趨勢を先取りしたものであったことが判明する」と述べている。

民族紡績業の内陸部への展開が、在来型の太糸生産に適した立地条件をそなえていたことは、本稿でも分析したとおりである。しかしながら本稿は、このことからただちに、「在華紡」の圧迫を重視する見解を婉曲に否定して、「中国綿工業の合理的発展」と一面的に位置づける議論に同意できるわけではない。その主な理由は、「在華紡」の圧力が歴然としてあった時期とそうでない時期とを無媒介に直結して扱う超歴史的な思考方法に違和感を禁じえないからである。問題は、中国内陸紡績業一般ではなく、ほかでもなく一九二〇年代から三〇年代前半にかけての内陸民族紡の動向にあった。とりわけ、一九二〇年代後半における内陸民族紡の勃興を説明するためには、「在華紡」の雪崩をうった進出とそれがもたらした中国市場の重層化が不可欠の要因としてあった。沿海地方における質的發展(近代セクター向け細糸生産の増大)と内陸地方における量的發展(在来セクター向け太糸生産の増大)とが同時並行的に進行したのは、まさしく「在華紡」の進

出が結果した構造的変化であった。このような構造的変化のもとで、民族紡のなかには立地条件をいかにせる内陸部への展開という選択に活路をみいだすものも出てきたのである。これを後退とみるか、前進とみるかは、一つの事象の桶の両面にすぎない。議論すべきは、「在華紡」の存在を論外において、立地条件という一面だけで、この事象をはたして説明しきれるか、という点にある。本稿の認識では、そもそも内陸部の立地条件がなぜ一九二〇年代後半にとりわけ際立つことになったのか、そのメカニズムを解明するうえで「在華紡」のもたらした構造的な圧力は不可欠の要因をなすものと考ええる。

32/01	1440.0	182.500	262.8	278.5	259.5	33.000	47.52	49.67
32/02	1456.5	187.500	273.1	289.7	261.6	33.625	48.98	50.68
32/03	1509.6	192.500	290.6	310.8	271.9	34.250	51.70	50.88
32/04	1488.2	182.750	272.0	293.4	264.9	35.750	53.20	47.22
32/05	1474.1	174.750	257.6	277.4	248.4	34.750	51.22	44.02
32/06	1471.4	167.750	246.8	261.6	239.3	30.500	44.88	41.75
32/07	1481.9	164.000	243.0	260.5	241.7	29.500	43.72	40.52
32/08	1482.0	171.750	254.5	267.2	250.2	32.250	47.79	40.47
32/09	1482.4	169.250	250.9	267.2	250.5	34.000	50.40	40.90
32/10	1468.4	164.250	241.2	255.0	241.4	32.750	48.09	38.09
32/11	1418.8	156.500	222.0	241.5	219.3	31.625	44.87	36.21
32/12	1413.0	151.000	213.4	236.2	214.8	32.125	45.39	37.28
	国幣1千元 当り長沙元	国幣元				国幣元		
33/01	1014.7	218.414	221.6	242.7	221.2	45.751	46.42	43.79
33/02	1010.9	213.064	215.4	241.6	222.0	44.293	44.77	42.87
33/03	1009.6	211.741	213.8	234.3	214.3	43.363	43.78	41.21
33/04	1008.6	205.850	207.6	226.8	211.1	43.225	43.60	41.24
33/05	1006.8	205.000	206.4	224.9	208.7	44.250	44.55	42.10
33/06	1007.9	208.500	210.1	225.1	208.7	47.850	48.23	42.21
33/07	1001.9	205.000	205.4	222.8	208.7	45.750	45.84	40.58
33/08	1000.2	202.500	202.5	219.2	208.7	45.500	45.51	40.73
33/09	1002.6	202.500	203.0	215.9	207.4	41.125	41.23	41.19
33/10	1002.8	201.500	202.1	215.1	206.2	40.625	40.74	39.80
33/11	1007.6	202.000	203.5	214.3	205.5	39.250	39.55	36.68
33/12	1008.4	200.500	202.2	211.1	200.7	38.000	38.32	35.87
34/01	1008.4	194.750	196.4	207.6	197.6	33.586	33.87	37.15
34/02	1007.2	193.000	194.4	207.5	197.5	34.619	34.87	38.00
34/03	1014.1	190.000	192.7	207.4	197.1	33.276	33.74	37.18
34/04	1010.0	183.000	184.8	204.1	195.1	32.036	32.36	36.19
34/05	1004.3	182.000	182.8	199.3	191.8	33.379	33.52	35.79
34/06	1001.1	190.000	190.2	203.3	192.6	36.376	36.42	36.09
34/07		190.000		204.0	193.5	37.500		36.00
34/08		196.500		208.7	203.1	38.000		36.00
34/09		187.500		207.0	208.9	32.500		36.00
34/10		185.000		206.5	211.1	32.750		34.77
34/11		195.000			208.6	35.000		35.25
34/12		197.750			214.5	38.500		35.09

資料) Aは胡適編『湖南之金融』湖南經濟調査所叢刊(民国23年8月)付録150—155, 157—158頁。B, Fは『中国棉紡統計史料』(上海市棉紡織工業同業公会籌備会 1950年10月)124—127頁。D, E, Hは孟学思編『湖南之棉花及棉紗』湖南省經濟調査所叢刊(民国24年7月)上編80—81, 下編58—59頁。

備考) Aは原表では、民国18年(1929)9月まで旧暦によっているので、新暦に換算しなおした。また1933年1—3月の間、国幣元とのレートが欠くので、1国幣元=0.715規元両として、規元両とのレートから換算した。1932年2月はデータを欠くので、前後の月の中間値を採用した。原表の明らかな誤り、二箇所を訂正した。

付表一 上海と長沙の綿花、綿糸市価の比較

年月	項目	長沙申銀匯 (A)	金城 20 手 上海価(B)	長沙元換算 (C)	金城 20 手 長沙価(D)	岳麓 16 手 長沙価(E)	通州綿上海 市価(F)	長沙元換算 (G)	常德綿長沙 市価(H)
	規元 1 千両 当り長沙元	上海規元	$C=A \times B \div 1000$ 長沙元	長沙元	長沙元	上海規元	$G=A \times F \div 1000$ 長沙元	長沙元	
29/01	1382.3	190.250	263.0	280.0	263.5	34.750	48.04	41.66	
29/02	1391.5	189.000	263.0	288.3	254.3	35.750	49.74	40.80	
29/03	1404.1	199.000	279.4	297.6	261.7	37.250	52.30	42.25	
29/04	1400.9	197.000	276.0	295.1	260.0	38.500	53.94	44.17	
29/05	1397.0	190.000	265.4	276.0	251.3	37.500	52.39	42.83	
29/06	1390.1	187.000	260.0	267.8	240.2	36.250	50.39	41.58	
29/07	1387.3	183.500	254.6	269.4	243.4	36.500	50.64	37.86	
29/08	1380.1	190.750	263.2	274.0	251.7	36.250	50.03	37.55	
29/09	1385.6	195.000	270.2	281.1	258.8	37.000	51.27	42.42	
29/10	1399.6	193.250	270.5	277.3	254.8	36.000	50.38	43.95	
29/11	1392.2	191.250	266.3	274.6	253.0	35.000	48.73	42.75	
29/12	1395.1	182.500	254.6	268.8	250.0	34.500	48.13	44.21	
30/01	1398.9	182.000	254.6	267.2	245.4	36.000	50.36	43.54	
30/02	1401.7	182.500	255.8	266.9	246.1	37.000	51.86	44.11	
30/03	1404.9	178.000	250.1	259.8	245.0	35.750	50.22	42.39	
30/04	1397.8	177.250	247.8	256.6	240.4	36.500	51.02	40.90	
30/05	1393.8	175.750	245.0	254.3	236.8	36.500	50.87	39.81	
30/06	1387.9	175.250	243.2	257.9	233.9	37.500	52.05	40.39	
30/07	1373.1	175.375	240.8	253.5	234.5	36.750	50.46	41.74	
30/08	1367.0	177.500	242.6	256.6	243.2	36.250	49.55	40.99	
30/09	1372.8	173.125	237.7	255.5	242.3	34.500	47.36	41.07	
30/10	1378.6	172.500	237.8	253.1	238.7	34.750	47.90	38.91	
30/11	1383.6	171.250	236.9	249.8	236.8	34.500	47.74	39.28	
30/12	1385.4	166.500	230.7	249.1	236.5	33.500	46.41	40.42	
31/01	1391.3	173.000	240.7	249.6	241.0	36.000	50.09	40.64	
31/02	1385.4	189.750	262.9	261.9	247.4	43.000	59.57	43.81	
31/03	1386.7	192.500	266.9	273.3	252.2	43.750	60.67	47.44	
31/04	1376.7	187.500	258.1	269.1	250.0	43.250	59.54	45.73	
31/05	1372.3	186.750	256.3	271.1	247.1	40.500	55.58	45.52	
31/06	1368.6	189.000	258.7	271.6	246.8	41.000	56.11	44.79	
31/07	1370.9	189.000	259.1	274.1	250.0	41.000	56.21	44.97	
31/08	1371.2	194.000	266.0	274.7	258.8	37.750	51.76	48.77	
31/09	1375.6	191.250	263.1	275.8	262.1	36.500	50.21	59.00	
31/10	1408.9	199.000	280.4	302.7	273.6	35.250	49.66	56.12	
31/11	1442.6	198.250	286.0	306.5	266.0	34.500	49.77	51.81	
31/12	1450.1	192.000	278.4	298.0	262.1	33.250	48.22	50.19	

中国紡績業再編期における市場構造

付表—2 通州綿と寧波綿の市価比較

項目 年月	寧波申銀匯 (A)	通州綿上海 市価(B)	甬洋元換算 (C)	寧波綿寧波 市価(D)					
	規元1百兩 当り甬洋元	規元兩	$C = A \times B \div 100$ 甬洋元	甬洋元					
26/01	140.437	35.600	49.996	51.329	30/01	141.867	36.000	51.072	55.374
26/02	140.217	35.500	49.777	51.380	30/02	141.154	37.000	52.227	55.225
26/03	140.529	32.500	45.672	50.533	30/03	140.015	35.750	50.055	54.583
26/04	140.065	34.250	47.972	48.947	30/04	139.981	36.500	51.093	54.000
26/05	141.354	30.500	43.113	46.620	30/05	141.637	36.500	51.698	53.050
26/06	141.947	32.000	45.423	47.360	30/06	143.551	37.500	53.832	56.360
26/07	141.070	32.500	45.848	49.282	30/07	143.804	36.750	52.848	55.670
26/08	139.903	34.250	47.917		30/08	142.768	36.250	51.753	57.740
26/09	140.259	31.800	44.602	52.153	30/09	141.853	34.500	48.939	54.700
26/10	139.864	33.500	46.854	50.110	30/10	141.397	34.750	49.135	53.268
26/11	139.824	33.000	46.142	47.893	30/11	141.613	34.500	48.856	51.167
26/12	140.444	32.000	44.942	47.313	30/12	142.794	33.500	47.836	52.933
27/01	140.904	29.200	41.144	48.008	31/01	142.605	36.000	51.338	54.720
27/02	140.628	30.000	42.188	48.220	31/02	141.055	43.000	60.654	59.420
27/03	140.085	33.000	46.228	51.453	31/03	139.793	43.750	61.159	62.554
27/04	138.119	32.500	44.889	50.180	31/04	139.546	43.250	60.354	61.888
27/05	138.706	34.000	47.160	52.700	31/05	140.634	40.500	56.957	59.304
27/06	139.391	35.000	48.787	54.530	31/06	141.344	41.000	57.951	62.476
27/07	141.249	37.000	52.262	57.235	31/07	141.705	41.000	58.099	62.727
27/08	141.295	39.000	55.105	57.265	31/08	142.730	37.750	53.881	60.560
27/09	140.942	42.000	59.196	60.953	31/09	143.449	36.500	52.359	57.271
27/10	140.781	39.000	54.905	54.850	31/10	144.453	35.250	50.920	53.966
27/11	140.839	35.000	49.294	51.474	31/11	146.199	34.500	50.439	54.211
27/12	141.378	34.000	48.069	49.873	31/12	146.321	33.250	48.652	54.850
28/01	141.694	34.800	49.310	50.890	32/01	144.665	33.000	47.739	53.700
28/02	139.976	36.500	51.091	51.621	32/02	144.890	33.625	48.719	53.800
28/03	139.340	38.000	52.949	54.900	32/03	146.542	34.250	50.191	53.930
28/04	138.584	40.500	56.127	57.540	32/04	145.221	35.750	51.917	52.470
28/05	140.098	42.000	58.841	61.810	32/05	144.430	34.750	50.189	49.380
28/06	141.447	40.500	57.286	59.968	32/06	145.290	30.500	44.313	43.000
28/07	141.354	41.500	58.662	60.910	32/07	145.210	29.500	42.837	48.920
28/08	141.581	37.000	52.385	56.000	32/08	147.042	32.250	47.421	51.220
28/09	141.545	34.500	48.833	53.052	32/09	148.005	34.000	50.322	52.030
28/10	142.339	34.500	49.107	52.807	32/10	145.709	32.750	47.720	48.230
28/11	142.839	34.000	48.565	52.141	32/11	144.161	31.625	45.591	47.680
28/12	142.188	33.600	47.775	52.513	32/12	143.623	32.125	46.139	49.320
29/01	141.931	34.750	49.321	52.524	33/01	142.523	32.712	46.622	51.300
29/02	141.331	35.750	50.526	53.642	33/02	141.928	31.669	44.947	48.845
29/03	141.026	37.250	52.532	54.954	33/03	141.538	31.005	43.884	47.465
29/04	141.140	38.500	54.339	56.210	33/04	140.548	30.906	43.438	44.474
29/05	142.244	37.500	53.342	54.086	33/05		31.639		46.927
29/06	142.344	36.250	51.600	53.607	33/06		34.213		50.616
29/07	142.456	36.500	51.996	53.960	33/07		32.711		53.115
29/08	142.460	36.250	51.642	55.000	33/08		32.533		49.443
29/09	142.840	37.000	52.851	54.733	33/09		29.404		42.564
29/10	142.748	36.000	51.389	53.500	33/10		29.047		42.713
29/11	142.250	35.000	49.788	52.152	33/11		28.064		43.748
29/12	141.936	34.500	48.968	53.194	33/12		27.170		43.159

資料) A, Dは『鄞県通志』第五 食貨志 第三冊己編
上 金融 (一) 240—241葉, 第四冊庚編 生計
332葉。Bは付表—1のFに同じ。

